
流星のロックマン 4 DualStar

海羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4 Dualstar

【Zコード】

Z9213V

【作者名】

海羅

【あらすじ】

スバルたちは六年生になりいつもと変わらない生活が始まった
だがあるとき電波世界電脳世界で異変が起きた

突然変異したウイルス、200年前電脳世界で戦争を巻き起こした
二体の電脳竜

二人は電脳竜を使い再び世界を破滅しようとする組織と二体の封印
の鍵となるPGM争奪戦が今始まる!!

流星サーバーとのアクセス

星河スバル・・・小学六年生三度にわたる、世界危機から相棒のウォーロックと仲間達と協力して地球を救つた英雄
ウォーロック・・・もとAM星人FM星出身現在はウイザードと呼ばれるスバルと電波変換してロックマンとなる
響ミソラ・・・国民的代表ミュージシャン。スバルと同じ六年生相棒のハープと電波変換してハープ・ノートになる。スバルに恋心を抱いている

ハープ・・・ウォーロックと同じFM星人琴座ミソラの姉のような存在

白金ルナ・・・小学六年生コダマ小学校の生徒会長であり、クラスの委員長的存在。ゴン太とキザマロを下に仕える。スバルに恋心を抱いているがミソラに少しリードされてしまう

牛島ゴン太・・・六年生。相棒オックスと電波変換してオックス・ファイヤになる

伊集院キザマロ・・・六年生。情報収集が得意。ゴン太とはいコンビである

西蓮寺ハルト・・・コダマ小学校に転校してきた人物グローカーの
サイバードラゴン
電腦竜復活を阻止するため遊撃隊に選ばれた

相棒のスコルピと電波変換してスコルピオ・カイザーになる

スコルピオ・カイザー・・・氷属性 おおきな鎌を武器にして戦う 姿は蠍

スコルピ・・・・・アシッドと同じ人工電波生命体過去にアンドロメダに破壊されデータが飛んだが

大きな鎌を持っているWAXAが集め修復した

鳴無ミオ・・・・・ハルトの幼馴染 六年生 同じように遊撃隊に入る

相棒のアクアスと電波変換してアクアス・ネプチューンとなる

アクアス・・・・スコルピと同じ人工電波生命体

アクアス・ネプチューン・・・・水属性 トランペッタを武器にして戦う

エクスプロージョン
鬼神化

・・・・電腦竜の能力が入ったPGMがロックマンと融合するこれ
を、鬼神化

(エクスプロージョン) という

デュアル・エクスプロージョン
流星鬼神化・・・・・

二体の電腦竜の能力を解放し融合した状態

強力な力を発揮するが負担が大きい

エクスプロージョン
鬼神化形態

アルタイル・エース 銳い爪を使い戦う

ユニバース・ジョーカー

サイバードラゴン
電腦竜

アルテレギオン・・・ 200年前電腦世界を混乱に陥れた最強のサイバーウィルス

ユニバサリオン・・・ 200年前電腦世界を混乱に陥れた最強のサイバーウィルス

その他

アルタイルPGM・・・・紫のPGMとエースPGMが融合したもの

ユニアースPGM・・・・・黄色のPGMとジョーカーPGMが融合したもの 未登場

メタモルフォーゼ
変幻能力・・・・・周りの電波に合わせ姿を変える キズナ という
PGMである

アビリティブレイク
能力破壊・・・・・グローカーが電脳竜

ソウルブレイク
精神破壊・・・・・相手の心を闇に覆う能力
を復活させるために必要なPGM 電波変換、ウイザードの能力は
破壊する

ウェーブブレイク
電波破壊・・・・・電子機器や電腦世界電波世界に電波の障害を起す

キズナ ・・・・一いつのPGMを制御するPGM

キズナ ・・・・変幻能力を発動させるためのPGM

サイバーメラゴン
電腦竜の核的存在なものがこの上に載つているものです

いちおう本編とはかわらない部分や全く違つことが起きるかもし
れないでの

指摘などお願いします

世界を救つた英雄

宇宙人による地球侵略、D・オリヒメによる古代帝国ムーの復活、ノイズ流星メテオGの落下

この三度にわたる、世界危機。とめた人物はかつて人と関わらない人が勇気を出してとめた

その名は「星河スバル」そして彼に勇気を与えた電波生命体「ウォーロック」

この二人はどんな局面に立とづと仲間と自分を信じ敵と戦つてきた

それにより世界の人々は「奇跡の青い流星」と呼ぶようになった

今は平和な時代。スバルとウォーロック、そして、仲間達はいつもと同じ平穏な日々を過ごしていった

彼らは今日から小学校六年生新たな出会いが始まると共に新たな戦いも始まる

鬼神化

エクスプロージョン
鬼神化の追加 · · · といつより

新たに思い浮かんだ能力等です

アルタイル・エース

氷属性 恐竜の姿をしたロックマン

背中に電波を帯びた翼を持っており

空中を自由に飛び回る

腕に鋭い爪を持つており

氷の衝撃波を出すこともできる

DNB 必殺技の名前です

はローブリザード（デュアル・ロック・ブリザード）

ユニバース・ジョーカー

雷属性 天竜の姿をしたロックマン

こちらも背中に電波の翼を帯びております

空中を自由に飛びまわれる

腕に鋭い爪を持つており

雷の衝撃波を出すこともできる

D N B デラゴン・ノーブル・ビッグバン
必殺技の名前です

はD L B O R T E C K C A R E (デュアル・ロイド・ボルテックカー)

デュアルーツ・ナイト

無属性 白龍の姿をしたロックマン

背中に無数の剣の刃を持っている

D N B はデュアルーツサークル

鬼神化（後書き）

かなり悩みました

起床と遅刻（前書き）

最近授業中小説を書いています
W
W
ばれないように
がんばってかきまーす

起床と遅刻

ジリリリリリリリリリリリリ

彼・星河スバルは、目を擦りながらベッドからおきた。

「ふあ～～～～、そりいえば今日から六年生か。」

スバルはクローゼットから服を出し着替え始める

「ウォーロックいい加減起きてよ」

ウォーロックと呼ばれた人物は、今は普通のウェザードだが元はFM星からやってきた

宇宙人である

くんあ、俺なんて着替えもねえし、飯なんてくわねえから良いじやねえか>

「ふう～～ん、じゃあハンターから君を追い出して一人で学校に行こうかな

それとも委員長が怖いから来ないって嘘言つておけば良いか。」

「さて今日からスバルは六年生か。」

(単純だなウォーロックは)

着替えを済ませソビングへ行つた

食卓には既に朝食があつた

「おはよう母さん」

「おはようスバル。今日から六年生か。」

「うん。」

「大吾さん仕事帰つてこられないから、残念ね」

スバルの父はWAXAで宇宙調査員として働いている

「あら、もうこんな時間? スバル早く食べちゃいなさい。」

「ふあーー」

パンを口に含んだまま答え牛乳で一気に流し込む

そこにはコースキャスターの声が届いた

『 昨夜未明、WAXAがとある遺跡調査をしていたところ、ほんに200年前の電腦世界

で一体の電腦竜^{サイバードラゴン}が戦つていたことが分かりました 』

「ふう～～ん、200年前つていうとまだワープロード通つてい
ないんだよね?」

くんな事俺が知るか。それよりスバル、新学期早々遅刻はまずいで
しょ？」

スバルはテレビに釘付けになつていて時間を忘れていた

「わああああ、やばい、母さんいつきまーす。」

「気をつけてよー」

スバルは大慌てで家を飛び出した

グローカー本部

「それで、例の作戦はもう実行できるのか？」

暗闇の中椅子に座っている男が問いかけた

「はい。ですが、PGMのほうがまだ不完全ですが・・・多少の誤差があつても大丈夫です」

問い合わせられた男が答えた

「構わん。使おうが使わないだろうがどの道あれは手に入るのだから・・・」

「分かりました。では実行に移ります。」

暗闇から男が消えた

「 やつは、 やつで電脳竜が 我らの手に 」

坂は田代駅をフツと笑った

起床と遅刻（後書き）

むつしました
ww

転校生は顔馴染み？（前書き）

ひじりまがあつてるかどうか分かりません！！

転校生は顔馴染み？

「ダマ小学校の始業式が終わりスバルたちは教室へ帰るとこ

「はあ～～～、今日から六年生か。」

「何今更言つてるんだよ。おかげで俺はあの女が長時間喋つっていた
せいで

体が伸びちまつた。」

（あの女といつと委員長のことだひつ・・・あえて言わないけど）

ウォーロックが不機嫌な理由は、始業式、生徒代表の挨拶が生徒会
長である

委員長であった。普通だったら2・3分で終わるはずだが委員長の
話は

30分も続いた。

おかげで今日入学した一年生は、ほとんど眠つてしまいスバルたち
もこの有様。

「帰つたら一暴れするか。」

「それだけは勘弁してくれ・・・。」

スバルは教室に入りながら言った

相変わらず、Aはほとんど変わっていない

変わったといえばジャックがWAXAに入り特別調査部隊に入ったとか

すると担任の育田先生が教室に入ってきた

「みんな～～～席着けー。」

先生の一言でざわついていた教室が静まり返った

「えー、今日は新しく転校生が来ている。みんな、顔や名前は知っているが

実際に見るのは初めての人が多いかもしれん。」

「だれなんだろ？、転校生って。」

「さあ。」

「へ、どうしたの？」

「いや、なんか変な感じがするんだよ。」

「変な感じって？」

「いやなんでもない」

ウォーロックがそう言いかけた瞬間教室のドアが開いた

クラスの皆は硬直した

もちろんスバルもである。な世か？

それは転校生に誰でも知ってる人だからである

たかスノ川たちにはかかるた

共は地球上の平和を守るために何間であるか

「今日からこの学校に転校してきた。」
響//ソトです。よろしくお願ひします。」

クラスから歓声が上がった（主に男子）

刀物の鑑定法

サイン語~~~~~

静まり返っていたケラスが又わざわざ始めた

「ウォーロック、さつきの変な感じっては、もしかしてハープのこと

ハープとはウォーロックと同じFM星人である

くいや、違う。もっと別な電波だ。

「別な電波つて……」

スバルがそう言いかけた瞬間クラスから妙に怖い視線が送られてきた

「な、何? なんでみんな僕の事見てるの?」

(なんか、視線がヤバイ……しかも委員長まで)

「じゃあ、星河、お前響の隣な。」

先生はそつ告げHRの続きをした

「よろしくね。スバル君。」

「う、うん。」ホームルーム

スバルはいまいち状況がつかめず曖昧に答える

(まだ委員長の視線が……)

こうして僕達の新しい学校生活が始まった。

転校生は顔馴染み？（後書き）

長すぎだと自分は思っちゃいます・・・

異変電波（前書き）

前回はちょっと文の構成がうまくこもれませんでした

異変電波

「グローカー本部」

「ゼオル、作戦のほうはどうしている?」

ゼオルと呼ばれた男は男に報告した

「はい、順調で」「やりますミカル様。」

男・ミカルは小さくうなずいた

「たかがPGM捕獲のためども、そつ警戒はいらないと思つがいち
おつ

レウンをつけろ。」

「了解。すぐに連絡します。」

ゼオルは暗闇の中から消えた

「WAXAにPGMはわたさない。先祖のためにも・・・」

「コダマ小学校」

「ふ〜〜〜、さあて帰るかウォーロック。」

<学校つてこんなに長く行かなくなると疲れるもんなんだな。>

今日は午前中で授業が終了した。スバルたちはこれから家へ帰るとい

教室を出ようとすると誰かに声をかけられた

「まつて、スバル君。」

スバルが声がした方向を向くと今日は今日コダマ小学校に転入してきた響ミソラであった

「なに?//ソラちゃん。」

スバルが聞くとソラもじもじしながら言った

「あ、えーっと……その……今日時間あるへ.

「あんだけど……」

スバルは不思議そうに首を傾げた

「じゃあこのあと、屋上に来てくれない?話したいことがあるんだ
けど。」

「別良いけど……」

「ほんと……ありがと。じゃあ先行ってね。私先生に呼ばれてる
から」

やつこつとソラは駆け出してしまった

「僕達も行くか。」

くめんじくせーー>

スバルたちは屋上に続く階段を上った

だんだん屋上に近づいていくと突然ウォーロックがスバルの歩行をとめた

く待て、スバル 屋上から変な電波が発生している。>

「それって、朝言つてたことじやない？あ、でもあれつて結局ハープの電波じやないの？」

く違う。ハープの電波も感じたが、それより強力な電波・・・・・・

現代のものじやない。>

く俺もよく知らない。けどそれが何なのか調べに行く。>

「分かつた。」

スバルたちは屋上へ入つていった

人気も無く静かな場所になつている

「どこからその電波が感じるの？」

く今探してゐる

ウォーロックが妙な電波を探していると突然屋上に誰かが来た

「……」

入ってきたのはミソラだった

「ミソラちゃんか。」

「何私じゃ悪かった?まさか委員長がよかつたんじゃ……」

〈スバル、スプリングラーだ!!--〉

「……分かった。ミソラちゃん、ごめん急な用事ができて

又今度はなして。」

そういうスバルは駆け出していくてしまった

「あ・・・・・・」

ミソラはただ一人屋上に残された

〈追いかけなくて良いの?〉

話してくれた相手はパートナーのハープである

「うん。だつて急な用事って言つたし……私たちも帰るか?」

ミソラは屋上から出て行った

異変電波（後書き）

今日が1月1日で…

愚痴後お泊り？（前書き）

最近途切れ途切れでつっかえます

愚痴後お泊り？

「もうなんのなのよ、スバル君たら女の子の気持ちがわからんないんだから。」

「ほそほそと駆けてくるのは響//ソニラである

「だいたい、私が何のためにこの町に来たと思つのよ…………」

ハアと溜息をつく

「おじおじしていてもしょうがないでしょ。」

「せうね。まず今日泊まれる場所を探さなくちゃ。」

誰かに聞けりと歩みだしたとき

「あれ？ もしかして//ソニラやん？」

ファンの人かと思わず逃げようかと思つたが

声の人物はスバルの母・星河あかねであった。

スバルたちはウーブステーションの前まできた

「はあ、はあ、ウォーロック、そりこへば思つたんだけど。」

「なんだよ。」

「今まで電腦の中にウイルスや電波体が入つたら、そのシステム化なんかが

暴走しなかつたけ？」

〈例えば？〉

「あのスプリングクラー。変な電波を感じているんならウイルスかもしないじゃん

だつたら、水をあちこちぶちまけているじゃん。」

ウォーロックは考え込む

「そうだよな。俺達の経験上大体ウイルスが入つたら

電腦機器が暴走するのは当たり前だつた・・・・・

「考えていても仕方が無い。電波変換しよう。」

「よし、久しぶりに暴れるか！－！」

スバルはハンターVを掲げいつもの言葉を叫んだ

「トランスコード003、シユーティングスター・ロックマン！－！」

スバルたちはウェーブステーションからウェーブボードへと繋がる軌道を

通つた

くなんか、変わらないな。 >

「確かに・・・でもなんか変な違和感がする」

く久しぶりの電波変換だし銃つてゐるだらうつよ。急ぐぜーーー。>

「うんーーー。」

~~~~~@「ダマタウン~~~~~

ミンラの愚痴がスバルの母には聞けてしまつたらしく

じょうがなく事情を説明した

「わー。そんなことが。」

あかねが心配そうに言つ

「でもスバルもスバルよね。話がある女の子を見捨てて、どうかい  
くなんて。」

「私がいけないんです、急に呼び止めたから・・・。」

下を俯きながらミンラは言った

(ほかもスバル君に告白しようとしたなんて、いえないし……)

まあ困っているのは事実だし……）

「ミソラちゃん、もうこんな時間だし外はつくと変な人に声かけられそうだから

今田うちに泊まってきたよ。」

あかねはにっこりと微笑んだ

「え、でもせっかくの家族団欒を邪魔しちゃいけないし……」

「遠慮しなくて良いよ。何なりずっと家にいる？」

ミソラちゃん一人暮らしなんでしょ？」

「え……」

ミソラは驚いた

(なんでスバル君のお母さんが私が両親いないこと知ってるの)

「スバルから全部聞いたわよ。初めてブランザーになつたつていうこと

両親がいなくて寂しい思いをしていたこと。

スバルも自分でもなんかできないかな～って言つていたよ。」

耳に入つてはいながら心に入つていた

人を信じる・・・・・

「はい。・・・・・よろしくお願ひします！！」

「こしてもスバルつたらよほどミソラちゃんのことが好きなのね。

「え、」

ミソラの頬が突然赤くなつた

「じゃあスバルが帰つてくるまで部屋で休んでいてお夕飯の用意するから」

われに返つたミソラは自分でも何か出来ないかと聞く

「あの、私もお手伝いしたいです。何か出来る」とありませんか?」

「わかった。じゃあそこ」の食器出して

「うしてミソラの新しい生活が始まった

## 愚痴後お泊り？（後書き）

今回はミニアニラの話・・・・不定期でこんななんやつてすいません

次回はウイルスバステイキングです

## 雑音（ノイズ）

ウエーブロードをまっすぐ進んでもぐに、スプリンクラーの電腦へと続く

アクセスサーバーがあつた

「いくよ、ウォーロック。」

「スバル、先に言つておくが結構ヤバイ電波がこの先から発している。十分警戒しろ」

「分かつた。」

そしてスバルは電腦へと入つていった

メテオGの事件から電腦世界へ入つていなくても違和感があるのは変わらない

電波の発信先を探すとスバルがあるものを見つけた

「ん？ あれは・・・」

スバルは中央の広い場所へ行つた

「こいつらか。」

「でも見たことあるウイルスだけど様子がおかしい。」

スバルたちが見たウイルスは背中に翼が生えていて

尻尾を帶びており原型がメットリオである

「なんか、厄介者だな。とつとと片付けるぞ」

「バトルカード、プラズマガンー！」

発射された電撃はメットリオにあたり辺り一面煙が舞い上がっていた

「みせうたば。

待て、いやいへ

ウオーロックが上を見上げていた

同じくスバルも上を見上げるとそこには巨大化したメットリオであつた

「なんでこんなに大きいんだ！！」

<オレにもわかんねえ。ただ妙な電波を発し続けていく>とには変わりねえ>

一人が話しているのを狙つたのかメットリオは尻尾でスバルを吹き飛ばした

「スバル！－おい、おきりよ、おい！－」

メットールがだんだん近づいてくる

「くそ、こいつらなんなんだよ。ただの電波ウイルスじゃない」>

ウォーロックは強制ウェーブアウトした

現実世界へ戻ってきたスバルはウォーロックの応急処置で

なんとか傷を治すことは出来た

「とんだ厄介やつだ」>

応急処置をしたスバルをウォーロックが眺めている

「じつやひでえな。おふくろに見せられねえ。」

するとスバルの意識が戻った

「う、うーーん

「スバル？ 目を覚ましたか？」

「ん、んん？ ウォーロック？ 僕さつきまで電腦世界についてウイルスと戦っていて、

そっから・・・

「じつやひでえな。おふくろに見せられねえ。」>

「さうか・・・でもあのウイルスなんだつたの?」

「さあ俺にもわからねえ」

するとスバルのハンターで電話着信音が響いた

「だれからだらう?」

ウインンドウを開くとそこにはWAXAのヨイリー博士が映った

『おひさじぶりね、スバルちゃん、ウォーロックちゃん』

雜音（ノイズ）（後書き）

結構疲れます

「ヨイリー博士！…ビルしたんですか？」

『いや、ちょっと変な電波をうちのコンピューターがキャッチしたから

追跡したらこうだったのよ。』

「実は僕達も妙な電波をキャッチしたんです。」

ヨイリー博士はほほうと頷く

『せうか、じゃあせつかくだから変なウイルスのことについても教えてあげるよ。』

ヨイリー博士はまるで全部見ていたかのような口調で話した

それに対してスバルたちはちょっと動搖した

『なぜ、僕達がウイルスに襲われたのを知っているんですか？』

『まあ、知るのはこちへきてからね？』

「…………わかりました」

スバルたちはWAXAへと向かった

久しぶりに見たWAXAはいつもと変わらない雰囲気を出している

ウーブライナーから降りたスバルたちは新たに建てられた

建築物に目を引いてる

「おい、スバル見てみるあそこにウイザードが飛んでるぞ。」

「ほんとだ。最近のWAXAも進化しているな～～」

入り口の門をくぐりWAXAへと入っていった

「中は大して変わらないね。」

「だな。それじゃ婆さんの所へ行こうぜ。」

「WAXAの研究所は確か・・・あつちか」

近くにある森内板で研究所がどこにあるか確認して

大きな門をまたぐつた

「ヨイリー博士。」

「あら、スバルちゃん。よくきたね。」

「久しぶりだな、ばあさん。」

「ウォーロックちゃんも元気そうで。」

「それより博士、先ほど言つてた電波はなんなんですか？」

「そうだ、あの電波でウイルスが突然変異して、スバルはこの様だ。」

「

「まあ、あわてなさんな。」

ヨイリー博士は多く息を吐いてから言つた

「あの電波はね、現代の電子機器が発している電波じゃない。」

古代の電波なのよ。」

「古代の電波？」

スバルとウォーロックの声が揃つた

「人は古代の電波といふことに驚いているだろう

「その古代の電波とは・・・」

スバルが恐る恐る聞く

「まあ古代って言つても200年前のだけどね。」

「何でその昔の電波がこの世の中に・・・」

「スバルちゃん、今朝のニュース見た?」

「はい、見ましたけど……」

「WAXAが何か見つけたというニュースは見た?」

(今朝のニュース……たしかWAXAが遺跡で200年前の  
電腦……ん?)

スバルは考え込みあることに気がつく

「もしかして、あの電波の発信源は……」

「そのまさかだよ。」

ふと階段から誰かの声がした

## 200年前（後書き）

最近//二つの出版があつません  
委嘱書も・・・やうやくだれなれば何か二点ですね

## 電腦書（サイバーネルソン）（繪畫モード）

最近PCに向む時間があつません・・・

## 電腦竜（サイバードラゴン）

「暁さん！！」

階段から聞こえてきた声の主はサテラポリスのエース

暁シドウであった

「久しぶりだね、スバル君、ウォーロック。」

「久しぶりのはいいけどよ、その電波の発信源ってなんだ？」

「やつやつ、」

シドウは一つ息をはいてから言った

「あの電波は、200年前電腦世界で暴れた一頭の電腦竜の電波だ。

」

その言葉にスバルとウォーロックは目を点にした

「え？ 電腦竜って今朝ニュースでやつてた奴ですよね？」

シドウとマイリーは「ぐくとつなづいた

「まじかよ。」

「遺跡を調査していたら、かなり危険な電波を発していた。」

「私達が、その遺跡を調べていたら一部のPGMと電波が外部に飛んでいた。」

マイリーがシドウに続いて言つ

「外部に飛んでいたって……それって電子機器や人間に害は無いんですか？」

スバルが恐る恐る聞く

「こまのところ電子機器には支障が出ない。でも、外部に飛んだPGMは電波変換した

人間と融合してある姿になるのとウイザードや電波変換した人の

能力や形態を破壊したりするらしい」

くそのある姿ってなんだ？」

「それは分からぬ。でもスバルちゃんたちがもとのPGMと融合したら

間違いなく暴走する。」

「暴走……」

「だがエースPGMを持っているスバル君にはPGMは融合できな  
い」

そういうてきたのはシドウであった

「そ、そりですか」

スバルがほっとため息をつく

「そこでだ、スバル君にお願いしたいことがある。」

「なんですか？」

「実は、そのPGMがある場所に今から行ってほしいんだ。」

「ええ！？」

「おい待てよ、スバルは今怪我をしているんだ、行かせたらそれでこそ暴走する。」

「……………そ、うか。実は僕もその場所に行つてきたら、ウイルスにやられた。」

「ウイルスって翼や尻尾は生えているあれですか？」

「ああ、そうだ。…………そ、うかスバル君が怪我をしているなら仕方が無い

又今度の機会に連絡する。」

そういうシドウは研究室を出て行った

「といつてね。気をつけてね。スバルちゃん。」

「わかりました。」

スバルたちはWAXAを出て行つた

## 良い子は帰る時間

スバルたちはWAXAを出てウェーブライナーを待っていた  
すると突然ハンターから電話が来た

「ん? 誰からだろ?」

ハンターを取り出し画面を開いた

「はい、もしも・・・」

『おひそかにい!』

電話をかけてきたのは響//ソラであった

突然の怒号にウォーロックは耳をふさいでいる

「ビ、ビ!したの//ソラちゃん。そんな大きな声だして。』

『どうしたの?じゃないわよ。今何時だと思つてるの? 7時だよ!』

良い子は帰つてくる時間だよ!』

くあ~~~~~耳が~~~~~>

(ウォーロック)めん流石にそれだけは助けられない・・・

「でも、なんでミツリちゃんが僕がどこかへ出かけているって分か

つたの？」

『ふ～～～ん、スバル君数時間前の会話も忘れたんだ～～～だれが大切な話があるついでにこの女にたいして、用事があるから又今度つて言う

人がいるのかな～～～』

話の内容に一目瞭然

スバルはぎぐつと来た

もううんここれは起爆剤に過ぎない

「えっと・・・だねこれはその・・・つまり・・・」

うまく事情が説明できないスバル・・・

『私より用事のほうが大切かな～～～』

(やばい・・・・)

ミンカラは怒ると委員長と同じくうりに暴れだす

止められるのは誰もいない

スバルはあまり興奮せないよつに息を吐き出しだした

「「・」・」めぐ。どうしても外せなかつたんだ。で・・・・・

今//ついにやるべきことのへ。」

あまり興奮せないことを心で念じたつむが返つて逆効果になつた

『ふん。』ひ今は今スバル君の家にいるから。

「へへ。」

『じゃあ、夕飯できるからなるべく早く戻るよ』おば様が言ったよ』

そういうことと余話が途絶えた

「理不<／>す<／>る・・・・・」

「由やんまでこののか・・・・厄介だな  
へいっせ、後で句言われるかわからねえぞ  
へいっせ、後で句言われるかわからねえぞ

そしてスバルはあることへ

「うかなんで//ついにやんが家にいるのへ。」

「そりゃ、スバルが話し聞かなかつただからよ。」

「関係あるのへ。」

「まあ、どの道家に帰らなきゃならんこいんだし

「なんか納得できない・・・」

スバルは肩を落としながら丁度来たウェーブライナーに乗った

ディナー？

スバルが家に帰ると待ち受けっていたのはやはり母のあかねとミソラであった

「えらい遅かったわね、スバル？」

あかねは顔が笑っているが口調が違う

ミソラもなぜか不機嫌そうな顔をしているが笑っている

（なんかやばいぞ）の空氣・・・

「さあ、スバル君夕飯にしましょ。」

（夕飯にしましちて・・・）

少しためらいがたい顔をするスバル。それに気づいたミソラは指摘  
はじめる

「何その顔？私が作った料理は食べたくないと言つ顔ね？」

不満気な顔で聞いてくるミソラ

なぜかその横ではあかねが微笑んでる

「いや別にそういうわけじゃないで・・・」

事情を説明しようとするスバルだがそんなこともミソラの威圧で消

されてしまつ

「なにが、そりこつわけじゃないのよ？」

そりこつ追求してくる//ソラ

だがそこにあかねが入り込んできた

「まあまあ、こんなところで立ち話をしちゃるとせっかく作った夕飯が冷めちゃうよ。

とりあえず中に入りましょ♪」

あかねの一言で一時休戦かと思いまや

スバルの説教は食事中も続いた

あかねの冷やかしと共に・・・

## 理由（前書き）

なぜか父が千葉へ単身赴任してしまいます  
そのためPCが仕えません  
しばらくお休みするかもしません

## 理由

夕食を済ませスバルは部屋へと戻つていった。ミソラは現在入浴中  
「いや～～、あの一人すんごい顔していたな。」

夕食中、スバルはあかねとミソラに説教やら質問などされた

お説教はともかくあかねの質問にはスバルはあきれた

「二人は正式に付き合つているの？」や「デートとかした？」など

誤解されるようなことしか聞かれない

スバルは答えよつとも答えられなかつたがミソラは「ええ、まあ。」

「そうでもないです。」などしつかりと答えている

「大体、僕たちはまだ正式に付き合つていないのに。」

「でもお互い好きなんだろ？」

「う・・・・・」

どうやら図星のようだ

お互い好きといつ気持ちがなかなか伝えられない

「だって、ミソラちゃんは芸能界ではいつもトップに立つてこる！」

## ヨージシャン

それに比べて僕は、素顔を隠している世界の英雄。」

「ん、まあそんぐらいの差があればな。」

ウォーロックも多少も納得しているようだ

すると突然部屋のドアノブがガチャリと鳴り中からミソラが入ってきた

「ハ、ミソラちゃん？」

「お風呂空いたから入ってきて良じよ。」

「わ、分かった。」

そしてスバルは部屋を出て行つた

二人の会話を見たウォーロックは「進歩してねえ」とため息をつきながらスバルと

共に部屋を出た

一人残されたミソラはハープに話しかけた

「今、スバル君私のことすきって言つたよね？」

「さあどうだろ？。」

ハープは知っているのか知らないのか分からぬ答えが返ってきた

「はあ／＼＼＼＼＼＼、スバル君来るまで何してよ。」

ミンラは立ち上がり本棚へと向かつた

「ミンラ、あんたプライベートって言つ言葉を知らないの？・」

ハープが呆れ顔で聞く

「だって男の子の部屋に入るの初めてだし、どんなものがあるかなーって思つたから。」

やはり知らないと確信したハープはくもつ良いと顔をなだめる

「スバル君つて宇宙の本しかないんだ。」

「悪いけど私もうねるわ。」

ミンラの行動についていけないハープはハンターへと戻つた

## 理由その2

部屋から出たスバルはすぐに風呂に入った湯船につかりながらいろいろいうなことを

ぼやきはじめた

「はあ――――、絶対やつきの話//ソラちゃんにきかれた。」

スバルの声が浴室全体に響く

〈地球人ってのはわからねえ。両思い出何が嬉しいんだ?〉

ウォーロックは扉を潜り抜けながら入ってきた

「てか、なんでミソラちゃん家に着たんだろう?」

そう考へ込んだスバルは頭まで湯につかって

「ぶはあ!!--」

〈悩んでいても仕方ないって言つ顔だな。〉

スバルは天井を見つめたまま答えよつとはしない

くじゃあ、俺は一足先に上がるわ。〉

ウォーロックは浴室から出て行った

「悩んでいても……か。」

スバルの独り言は嫌のように響いた

## 理由その2（後書き）

今日は短めです

訳

風呂から上がりつたスバルは一階へと向かつた  
自分の部屋に入るとミソラが愛用の音楽プレイヤーにイヤホンを繋ぎ音楽を聴いていた

「あ、スバル君。」

ミソラがスバルの顔を見たそれに対してもスバルは頬を少し染めた  
「どうしたの？少し顔が赤いよ？」

気づかれたスバルはちょっとのぼせたといって誤魔化した

「それにしても、スバル君の部屋って宇宙の本ばかりだね。」

＜宇宙オタクだからな。＞

ウォーロクが変な冗談を入れるがスバルは敢えて無視する

「父さんが宇宙飛行士だったからその影響かな？」

二人は会話が弾みクスッと笑つた

「ねえ、スバル君？」

「何？」

「私が『ダマ小学校に転校して来た理由とスバル君ちにいる理由聞きたい?』

突然話題を変えられビクツとする

「聞きたくない?」

答えるのに多少が戸惑つたが迷った挙句うなずいた

「うん。」

「じゃあ『ダマ小学校に来た理由は・・・・・

ミソラが話しだした

ミソラが『ダマタウンに来た理由は先日ミソラの街に原因不明の電波が大量発生し

電子機器などが使用不能になってしまった

丁度そのころ仕事をしていたミソラが引つ越したと知ったファン  
ダマタウンに引っ越しした

だが引っ越ししたのは良いもののミソラが引っ越ししたと知ったファン  
は毎日ミソラの家の

押しかけていた仕事も出来ないミソラは芸能活動を一時休止した

学校に行くにも行けなくて今日わざわざ電波変換したらしく

「それで、スバルに相談しようとしたと…」

「けど、僕が突然用事があるって言つてどこかへ行っちゃつたと。」

「そうよ、ほかにも大事なことを言おつとしたのに…」

「?なんか言つた?」

「ううん。なんでもない。」

「で、相談相手がどつかへいつたから町をぶらぶらしていたらおふくろに捕まつたと。」

ウォーロックが続けた

「やつこ」と。

ミソラが首を縦に振つた

「なんか行き当たりばつたり…」

深々とため息をつくスバル

「さて、俺はそろそろ寝るとするか。」

「え? もう寝ちゃうの?」

大きく伸びをしたウォーロックにスバルが問いかけた

「もう寝ちゃうのって、10時半くらいだぞ?」

たしかに小学校六年生にしては一〇時半は遅い

「じゃあ、私も寝るね。」

ウォーロックにつれて寝ようとする//ソラ

だがスバルはあることに気づいた

「といひでソラちゃん、今日はどうで寝るの?」

「スバル君家。」

眠たそうな目を擦りながら言つた

「いやいや、それは分かっているよ。でも僕たちのどいで寝るの?..」

「スバル君の部屋。」

今度はあぐびをしながらこたえた

「この部屋で寝つかつて?..」

「スバル君のベッド。」

なんとも予想外の答えが返ってきた

それに対しスバルはかなりあわてている

「え、・・・僕のベッドで寝るの?・・・じゃ、じゃ あ僕は床

で寝ると。

「すある君も一緒に・・・」

寝言を呟つていいるかのまゝに言つている

するとミソラはスバルのベッドの上でこてんと寝てしまった

え？ ちゅうと//ソラウヰン？ 寝ちゃったの？ ねえ？」

スバルが声をかけるか『ソラ』はビケリとも動かなし

いししゃなうえかそのまほ癪かせれば

山家集

卷之三

卷之三

アリーロックの意外な答えにアハルは慌てるのも当然のこと

国語の代表としてシシャンかたたの小学生と同様で癡るなど

日本全国民が許すはずがない

「だいたい、男女一緒に寝られると思うの?」

バーゲン

全く知らないといつ答え

「もひこよ、僕は今日、床で寝るから。」

そういう毛布を用意するスバルだがウォーロックはとめない  
<別に俺は止めないぜ。でもそんなところで寝たら明日のお前がや  
ばいぞ。>

ウォーロックが言っている意味は大体分かった

スバルは考えただけでゾクツとする

<だから今日はミソラの所で寝ろ。>

「・・・・・分かったよ。」

これ以上言つても無駄というような顔でスバルはベッドへ上った

そしてスバルはこの晩ミソラの寝返りを回避しながらも寝られずに  
いた

## 誤解（前書き）

タイトルと内容が一致しません

## 誤解

ミンラの寝返りを必死で回避していたスバルが起きると時刻は7時であった

真っ先に視界に入ったのはミンラの寝顔であった

「…………なんか、かわいいな。」

ミンラの寝顔にどっぷりはまってしまったスバル。

すると背後から突然声がした

「つたく人間の趣味は未だに理解できない。」

「なんだよ、寝顔を見ていると変な人と思うのか?」

〈人によるもの。〉

(予想をはるかに越えた適当な理由……)

ウォーロックは時計に目をやった

〈それより、そろそろ起したほうが良いだろ。〉

「そうだね…………でもどうやって起せば良いんだ?」

〈揺さぶって起す。〉

「それもまあナビ、せつかへ氣持ひへ寝てゐるのと並んでふつたら

悪いよ。」

「うじゅ、あ、キスすれば良じじゃなー。」

背後から又違う声が聞こえた

それはハープであった

「な、何を出したらいつてるんだ? 未だ小学生だよ。」

「普通に起すから良こよ。」

スバルは照れくわいつて叫びつた

下へ降りると食卓にて既に朝ごはんが並んでいた

「二人ともおはよ。」

「おはよ。」

「おはよう。」

未だ半寝状態である

スバルは起きつた

「二人とも朝から仲良いね。」

あかねがにこりと笑い出す

その瞬間スバルは口に含んでいた牛乳をふきだした

「あ・・・・朝から何言つてるの！－母さん－！」

するとスバルの背後からはニュースキャスターの声が聞こえ昨日の話題が広がった

『昨日未明、ドレットタウンで原因不明の電波が撒き散らされ周辺の電子機器が全て

使用不能になり・・・・』

「あ、ここ私がいた街だ。」

ニュースを見ていたミンラが言つた

するとスバルはニュースの内容にふとあることに気づく

「ねえ、ウォーロック。」

〈あ？〉

「昨日ジドウさんたちが言つていたけどあの古代の電波は電子機器に障害をもたらさない

つて言つていたよね？」

く確かに、そんなようなことを言つていたような…・・・・・

すると時計が7時半になつた

「スバル君、時間になつたから行こう。」

ミソラが誘うがスバルは一緒に登校してくると厄介になるので電波交換して

ウーブロードを運むのみで、た

「じゃあ、僕達も行くか。」

スバルはミソラ達に続いてかばんを持ち家を出た

## 誤解（後書き）

なんか最近急いで書いたので「いやいや」いやいやです  
次は委員長出でます

## 任務（前書き）

一ヶ月間更新できないかもしません

任務

学校へ着くと6-Aの教室はざわついていた

その理由はミソラの周りに何人の男子が話しかけていたからである

「ミツバちやんって好きな男の子のタイプつである？」

## 「オススメの場所は？」

（そういえばこの学校の男子約半数以上がミソラちゃんのファンだとか・・・）

あれって女子から何かを上げようとして言う、あれだろ？え～～

スバルはウォーロックがこれ以上口走らないようにとめた

「それはそうと、どうやつたら席に入れば良いんだ・・・」

すると本を読んでいた委員長が突然立ち上がりスバルのほうへと歩み寄ってきた

「おせあい、黒河船。」

「お、おはよう委員長。」

なんだか機嫌が少し悪そうな委員長

するとミンカラの席に行きたむらしていた男子のところへこきなこせんにから注意をしていた

そして男子は自分の席へと戻つていった

「おお、席にいけるよつに開けてくれたんだね。」

「べ、別に褒めなくて良いわよ。」

頬が赤い委員長

「じゃあ、僕授業の準備するから。」

「遅れないようにね。」

委員長と僕は席へと戻つた

それからスバルは授業をきちんと受けた

放課後、スバルはHRが終わるとすぐ帰りの用意をした

するとハンターから一通のメールが来た

ヨイリー博士からであった

『突然でゴメンネ。実はウーブライナーを二つ乗つたところだ

## レッドタウンにて

街があつてその山奥にある遺跡を調査してほしいの。

その遺跡には電腦竜のPGMがあるのそれをとつてきてほしいの。

あのPGMを狙つてゐる組織が実はあるからきをつけたね。』

『レッドタウンにて、今朝コースでやつてこたよな。』

「うふ。」

「どうする? 行つてみるか。」

スバルはしばらく考え込んだ

「分かつた行いつ。」

結論を決め早速行こうと教室を出ようとした瞬間

突然呼び止められたスバルは振り返った

すると背後にはミンラが立っていた

「ちょっと待つて。」

「どうしたの? ハハハハハ。」

スバルはなにかあるんじゃないかって言ひ顔で聞いた

「だつて、スバル君が私をおいて教室を出よつとするから。」

行動を読み取つているのかどうかも分からずスバルは適当な誤魔化しを入れた

「じ、実はサテラポリスに頼まれて、パトロールをしてほしこうて言われたんだ。」

これなら大丈夫だろつと思つたのが後の祭り

ミソラはそんな簡単な嘘を見抜いてしまつた

「ふ〜〜〜ん、じゃあドレットタウンに行くんだ。」

「う、」

勘付かれたのかスバルは硬直する

「もちろん、私も連れて行つてくれるよね？」

役者のような麗しい目で聞いてくるミソラ。

それに負けたスバルはしおがなくこいつ答えた

「分かつたよ・・・・・」

「やつた〜〜〜。」

ミソラは小さくガツツポーズした

<全く、女って言つのはわからねえ。 >

そしてスバルたちはドレットタウンに向かつた

## 実行

「ドレットタウンで原因不明の電波が出た日

一人の少年はなにやら小型の機械を持ち街をぶらついている

「あ～～～あ、なんでオレがこんなことしなきやならないんだ。」

周りの人とぶつかるのも気にせずぶつぶつと言つてくる

「大体こいつのはゼオルがやるもんじゃねえか？」

ゼオルとこいつの名前が出てきたといつこの少年はグローカーの一員だ

「いいじやねえか。どうせ暇だったんだしょ。退屈するより良いだ  
ろ～。レウン。」

レウンとこいつ少年に話しかけているのは彼のウイザードゼグルだった

「第一、こんなところにあのPGMがあるんか？」

「それがしらねえから今探してんだろ。」

二人が言い合つていると機会が突然鳴り始めた

「なんだ？」

「どうやら近くに例のPGMがあるらしいな。」

一人は音が強くなつていく方向へ行つた

すると着いた場所は山奥にある遺跡だった

「IJJに例のPGMがあるんか。」

「とつあえず行こうぜ。」

中に入り奥へ進んでいくと広間がありそこには一つのカードらしきものがある

「これか？」

「多分そうだ。」

レウンがPGMに手を伸ばそうとした所をゼグルに止められる

「まで、ボスは一つだけでいいって言つたはずだ。」

「そういうえばそうじつてたな。」

レウンは黄色いPGMを取り遺跡を出た

IJのあと不安定になつた電波が事態を巻き起し

スバルたちに被害を与える

実行（後書き）

グローカー久じぶりに出した気が・・・

## 暴走（前書き）

今日は鬼神化エクスプローラーが出来ます

## 暴走

ウェーブライナーを降りるとドレットタウンの町並みが見えた  
だがそのドレットタウンは電子機器が機能していない今人が誰もない

「なんか、二、三日来ていないのに変わっちゃった。」

ミソラがつぶやいた

「とにかくPGMがある場所に行け。」

「行くのは良いが、その例の遺跡から例の電波を発している。」

「確かに、なんかノイズと感じたこの無い電波が入り混じってる。」

ウォーロックとハープが言った

「それって危ないの？」

「ばあさんは、人間には害がないって言っていた。でもPGMは電波変換している

奴と融合してしまったらしい。」

「それじゃあ、みんな気をつけっこい。」

スバルたちは遺跡の中へといった

遺跡の中は暗く何も見えない

「デレックタウンの山奥にこんな場所があつたなんて。」

ミソラはスバルの服を掴みながら言った

「ほんと、私も気づかなかつたわ。」

「それにしても、この遺跡に書かれている絵って面白いよね。」

ミソラが見つけた絵にスバルに反応する

「ほんとだ。ん?」の絵なんかに似てるな?」

どれどれとミソラが覗き込む

見てみるとロックマンに似た絵であつた

「なんか、ロックマンに似てるな。」

ウォーロックが首をかしげた

そしてスバルたちは奥へと進んでいった

「JAPGmがあるんだね。」

スバルたちはPGMがある広い間にいつた

「これが。」

スバルは中央にある紫のPGMに手を伸ばした

「まあそれはいいから早くとつて、おさひまじよつぜ。」

そしてPGMを取り遺跡を出よつとした瞬間遺跡の中が「ゴゴゴゴゴゴ

ゴ」と音がした

「なに？」

全員が辺りを回すと遺跡内が揺れ始めた

すると入り口付近に昨日スバルたちと戦つたウイルスであった

「こつら昨日の……」

「なに？」「こつら……普通じゃないわよ。」

「なに？」「いや、言つたな……電波変換だ……」

「分かつた。トランスクード……シュー・ティングスター・ロックマン

！」

「ハープ・ノート……！」

二人はウイルスに立ち向かつた

「バトルカード、ニアスプレッド……！」

「シヨウクノート...」

一人の攻撃はウイルスに直撃したが傷一つ付いていない

「」のウイルス半端じゃないわね。

「一人相手でも勝てないなんて・・・」

そしてウイルスは尻尾を使い攻撃した

二人は吹き飛はされた

くく、これじや歯が立たない。スバル！！エースPGMを起動するんだ。

「分かつた。」

ロックマンはエースPGMを起動した

周りの電波がロックマンに集中していく

## だが次の瞬間

!

<どうした？スバル。>

「スバル君！！」

そしてまばゆい光が走った

ミソラ達が扉を開けるとロックマンはブレイブエースに変身しては  
いなく

別の姿になっていた

<まさか・・・・・融合したのか？>

**暴走（後書き）**

どんな鬼神体でしよう

**暴走流星（前書き）**

鬼神化のページを変えました

ファイナライズをしたロックマンは本来ブラックエースかレッドジヨーカーのはずだが

今のロックマンはそのどちらでもない全く別の姿であつた

く何が・・・どうなつているんだ?>

ウオーロックたちが見たものは紫色の装甲アーマーをまとったロックマンだ  
つた

「スバル・・・・・君。」

ミソラが硬直している

「グルルルウウウウウウウウウウウウウウ」

唸りをあげたロックマンは地面を思いつきり蹴りウイルスに向かつていつた

爪から氷の衝撃波を出し歯に立たなかつたウイルスたちが擊沈して  
いつた

その姿は恐竜のよつで電波を帶びた翼を持ち鋭い爪を持つてゐる

ウォーロックは嫌な感じがした

「一人とも、早くここから逃げる。」

後ろにいる一人に忠告した

だが時はすでに遅し

体から異名な電波を発しながら後ろ振り向いた

その間に今までに猿をしようとするティラノサウルスの図である

ገኘነት በኢትዮጵያ የሰውን ስራውን

くやはい、スバルは暴走してゐ！！早く逃げやかれ！！>

すぐに逃げようとしたかそこにロックマンが飛び掛かりハーフ・ノートに突進した

壁にぶつかりその衝撃で気を失つてしまつた

そして再びハープ・ノートに近づき鋭い爪を振りかざした

スバル！！いい加減目を覚ませ——————！」

振り下ろそうとした瞬間、ピタッと止まり電波変換がとけ

スバルはその場に倒れこんだ

一致した周波数とPGM（前書き）

久しぶりです・・・・・・

## 一致した周波数とPGM

スバルが田を覚ますと見えたのは白い天井

自分がベッドに寝ていたことに気づき体を起した

「んん、あれ？・・・・・・」はめどじこへ「

わざわざまで自分が暴走をしていたなんてことは当然覚えていない

「お、気がついたか。」

「シドウ・・・・・・さん？」

田を覚ましたスバルの横に座っていたのはシドウであった

シドウは椅子から立ち上がり棚の上においてあつた果物を剥き始めた

「シドウさん、何で僕が病院なんかで寝ているんですか？」

シドウは何も答えず剥いたりんごをスバルの前に出した

「君はドレットタウンの遺跡でウイルスと戦っていたことは覚えて  
いるね？」

「はい。でも相手が強すぎてヒースPGMを起動させようとしたら  
・・・・・

そこまでしか覚えていないんです。」

スバルは差し出されたりんご」を一齧りした

「あのあと、WAXAの研究部が来て遺跡の電波を調べたら大広間に大量の電波が蓄積していた

しかもそれは**電腦竜**の電波。」

「サイバードラゴン  
**電腦竜**。」

「そう。だがあの電波には電波変換した電波も残っていた……。」

「それってつまり……？」

スバル本人は気づいたのかそれでもシドウは話を続けた

「あれはスバル君。君は**電腦竜**のPGMと融合してしまったんだ。」

スバルは動搖を隠せなかつた

りんごを持っていた手がぶるぶると震えていた

「でも……シドウさんはエースPGMを持つていれば融合されることは無いって……」

先日WAXAで言われたことをスバルは思い出した

だがシドウは首をゆつくり横に動かした

「ああ、確かにそういった。だが新たなことは発覚した。」

「なんですか？」

「あのPGMとHースPGMは中の構造は全く違つんだが、放つて  
いる周波数や

電波は全く同じといふことが分かつた。もう一つのPGMは先に持  
つていかれていた

あれもジョーカーPGMと同じようなものだ。」

「じゃあ、僕がエースPGMを起動したら暴走するんですか？」

「その可能性は高い。だからこまコイリー博士に頼んでPGMを組  
み替えている。」

「じゃあ今後戦うときはジョーカーPGMを使うしか・・・」

スバルはそう考えたがシドウはあくまで拒否した

「だめだ。もう一つのPGMは持つていかれたといったはずビームで  
誰が持つているか

分からぬ状況の中でつかつたらむづきの一の舞になる。」

先ほどの大量の電波の話を聞いてわかつたのかスバルはうなずいた  
だがシドウの話はこれで終わりじゃなかつた

「それと当分は電波変換禁止。」

「え。」

「じゃあ、体には氣をつけるんだぞ。」

スバルは突然電波変換禁止といわれ慌てたがそんな事も知らないシ  
ドウは

颯爽と病室を出て行つた

## 責任（前書き）

どうもです本田一回田の更新  
実はある作者から小説の長さをもう少しうまくしてほしいとの事と  
電腦龍が電腦世界で戦っていたのは200年前といふことでお願い  
します  
でもこの話短くする一回田ができるかな?

## 責任

病室から出て行ったシドウを見送ったスバルたちは一息ついた  
「ふ〜〜〜〜、しかしどうなつているんだ?」

すると病室の入り口のドアが開きウォーロックが入ってきた

く気が付いたか。スバル。>

「ウォーロック。どこにいたの?」

くちよひヒリソラのところにな。>

「え?」

くくやつぱり何も覚えていやしねえ。>>

ウォーロックもスバルが暴走したときソラが怪我をしたところ  
とは覚えていないらしい

「ミソラちゃんがどうしたの?」

スバルは身を乗り出すよつな勢いで聞いてきた

掛け布団の端を掴んでいる手は震えていた

くいいにくじんだが、ミソラはスバルが暴走したとき怪我をした。>

「僕が、暴走して……怪我をした。」

硬直しているスバルは少し涙目で呟いた

「ああ、」

「くそ。」

スバルはゆっくりと立ち上がり窓の外を眺めた

「なんで……？」

外から入ってくる風がやけに冷たい

「スバル君は悪くないよ。」

突然背中から声がした

振り向くとミソラが松葉杖を突きながらその場にたつていた

「ミソラちゃん、その足……」

「これね大丈夫だよ。ちょっとひびが入っただけ、一ヶ月くらいすれば治るって。」

例え一ヶ月でも芸能活動を一時休止しなければならない

スバルはそれが悲しかった

「大丈夫じゃないよ。一ヶ月も芸能活動を休止しなければならない

んでしょう?」

「一ヶ月くらい良いよ。別に引退するわけじゃないし。」

ミソラはこっやかに笑った

「やっぱり僕がいけないんだ。」

「え?」

スバルの咳きミソラはなんて聞こえたのか分からなかつた

「僕がいけないんだ。」

「スバル君は悪くないよ。悪いのは私、付いてきた私よ。きやあ!」

「ミソラちゃん!!

ミソラはスバルのほうへと歩み寄りしだが使い慣れない松葉杖で

バランスを崩してしまい倒れこんだがスバルが優しく抱きしめていた

「スバル君・・・・・」

抱きしめられたミソラは顔を真っ赤にした

「ミソラちゃんが大丈夫でも僕は悲しい。説得できなかつた自分が弱い。」

「違うよ。ホントに悪いのは私。私のわがままに天罰が下ったんだよ。」

突然の出来事にウォーロックはただ見ているだけだった

「私はスバル君と一緒にいたい。」

「？」

眩きが聞き取れず首をかしげた

「だつて私はスバル君のことが……」

**責任（後書き）**

また長くなつた

## サポート（前書き）

あと今ロバースペの最終話見てなんだかまるが悲しかった

では本文行きましょ~~~~~

## サポート

「だつて私はスバル君のことが……」

ミンラが何かを言おうとしたそのとき病室のドアが突然開いた  
「星河君！－あなたが怪我をしたからっていつからすぐによく……つてあれ？」

中から入つてきたのはルナ、ゴン太、キザマロ、母のあかねだった

「あらり、お邪魔だつたかしら？」

首を傾げるあかねその後ろにゴン太とキザマロが顔を青ざめていた  
そして密着していたスバルとミンラはあわてて離れた

我にかえつた委員長はコホンと一つ咳払いをして喋りだした

「んん、スバル君あなた怪我は大丈夫なの？」

「僕はなんとも無いけど、ミンラちゃんが。」

全員の視線がミンラの足に行つた

「じ、実は足の骨にひびが入つて、全治一ヶ月なの。」

「それつてじゃあ、しばらくは歌えないって事？」

「ゴン太君！－！それは言っちゃダメですよ。」

「ゴン太の口走りにキザマロが止めに入ったがルナに注意された

「あんた達、ここは病院なんだからもう少しうつと静かにしなさい。」

一人は静まった

「それで、当分はどういう風に生活するの？？」

「一応退院が明後日にしてくれるので医者さんが言つていて

そのあと的生活は松葉杖かな。」

その生活に何か不満があるのか委員長はしばらく考え込んだ

「みんなで、ミツラちゃんの生活をサポートするのは？？」

提案を出したのはあかねであった

「それはいい案ですね！－！おほかま－－－」

「悪くないな。」

「ゴン太も賛成しキザマロもうなずいた  
「で、スバルはどうなの？」

あかねはスバルに話をふつてみた

「『まくはいい。』

帰ってきたのは意外な答えだった

「え？ 今なんていった？」

「僕は良いよ。ミソラちゃんのそばにいるとまた何かが起こってしまつ。」

スバルはそういうと病室を出て行った

開け放しの窓から風が強く吹いている

スバルは俺に任せろ。」

ウオーロックも続いて病室を出た

スバルとミソラの距離はだんだんとのいていた

## サポート（後書き）

区切りが中途半端でした

## 一人で考え込むな（前書き）

少し自分が考へてゐる内容と違つてきました  
でもがんばります

## 一人で考え込むな

病室を後にしたスバルは屋上で星空を眺めていた

「なんで・・・・・・・だよ」

独り言なのが空に向かって言つてゐるのかスバル自身もわからなかつた

その後ろでスバルの背中を見ていたのはウォーロックだった

くくシドウはスバルがミソラを傷つけたことがトラウマになつたから電波変換を

禁止したのか？>>

考え込むがなんの思い立ちも無いウォーロックは仕方なくスバルのほづくといった

く何一人で考え込んでんだよ。>

「・・・・・・・別に・・・・」

ウォーロックは意地を張つてゐるスバルを見て呆れ顔をした

くは〜〜〜、おまえそんなんで世界を二回も救つたのか？>

スバルはウォーロックの言つた事に反論しない

くおまえそれじや、ミソラに合わせる顔がねえじやねえか>

「だからなんだ」

スバルは珍しく追求し始めた

〈一人で考え込んでいても何も始まらねえってことだ

お前は世界を救つた英雄なんだぞ〉

ウォーロックの一言でスバルの顔が一変した

「そうだね いつだって一人で考え込んでいても何も始まらなかつた

仲間がいるからその壁を乗り越えてきた 僕が間違つていた

〈それでこそオレの相棒だ〉

「//ツリちゃんや委員長達に謝つてくる」

スバルは元気よく屋上から出て行つた

## 一人で考え込むな（後書き）

なんか矛盾しているところもありますが勘弁してください

スバルとウォーロックが話していた頃ルナとミソラは病室の外で話していた

「ゴン太とキザマロ、あかねは既に家に帰った

「『じめんね心配かけちやつて』

ミソラがルナに謝った

「なんでミソラちゃんが謝るの？」

ルナは突然謝られ動搖している

「だつてスバル君について行つたのも関わらず足手まといになつちやつて……

それに怪我して皆に心配かけちやつて……」

「//フリちゃんは足手まといなんかじゃないミソラちゃんがいるから

星河君……じゃなくてロックマン様が強いんじやん

するとミソラは突然微笑んだ

「ルナちゃんて本当にスバル君のことが好きなんだね」

突然そのよつな話をふられルナはびっくりした

「え・・・ちよ・・・・・//ソラちゃん?な・・・・何<sup>い</sup>てんの?  
わ・・・・・・・

わたし・・・・・が・・・星河君の所をす・・・・・す

× -

動搖しちぎて口が回らない

「ここの間わなくて」

そしてルナは落ち着いた

「はあ～～～～びつべつした」

「だいじょ?」

「うそ・・・・・・じやあ私のまつからも質問するね

星河君と//つらひやんつて付き合ひてるの?」

ルナと同じような質問をしたが//ソラはまったく動搖を見せなかつた

「うそうそ 私も付き合いたいけどなかなか告白できるチャンスが  
できなくて・・・」

ルナは//ソラの言葉に確信した

自分もこれくらい素直になれたら・・・・・と

二人が話していると誰かが階段を下りてくる音がした

「お～～～～い 二人とも～～～」

声の主はスバルであった

さつきとは違つていい表情をしていた

「二人とも・・・・・さつきは『メンネ・・・・』

スバルは照れくさそうに謝った

「いいのよーー困ったときはお互い様よ

「とりあえず元気になつてよかつたわ」

二人も続いていった

くみなさん～～～お取り込み中すいませんがもう就寝時間ですよ

ハープが皆に呼びかけた

「ほんとだーー私もう帰らなきや」

「委員長一人で帰れる?」

スバルが心配そうに聞いた

「大丈夫よ・・・・・終電には余裕で間に合つから」

委員長は荷物をまとめた

「じゃあ一人ともお休み」

「「おやすみ～～～～」」

委員長は急いで階段を下りた

「じゃあ僕達もそろそろ寝るか」

「うん」

二人は肩を並べて病室に入つた

## P.G.Mの戸体（前書き）

久しぶりですが訂正があります  
ミンラが住んでいた町はこの本編では  
ドレットタウンでしたがベイサイドシティです  
又隨時変更します

夜があけた

小鳥のさえずりで田を覚ましたミソラは欠伸を一つしてスバルのほうを見た

# 「わ！！スバル君の寝顔」

**実際問題**ミソラは男の子の寝顔を見るのは初めて

う・・・・・うん・・・・・・うんぢやない!!!

寝返りを打つたスバルは寝言をいつた

くあ～～～あ、スバルのやう思いつきり寝言をかましていやがるゝ

スバルより先に起きたウオーロックが言った

「しかしモリソラとか話ひやがせてるし」

続けてハープが言つた

ミントは顔が真っ赤にならベッドに倒れた

< わわわわわわ!! // ン♪ト? だいじょ? >

するとスバルがむくりと起き上がつた

「んん・・・・」

目を擦つているスバル

〈オレはしらねえぞ〉

「へ？なんのこと？朝っぱらからどうしたの？ってかミソラちゃん  
なんで顔真っ赤なの？」

自分が寝言を言つたのはもちろん覚えておりずソラがおきたのは  
數十分後であった

一人はあかねが作つてくれた朝食を口に運んだ

「二人とも今日はゆっくり休んでね」

「「ま～～～～い」」

「それとWAXAのシドウさんがスバルたちに話があるって言つて  
たけど」

「暁さんが？」

サンドイッチを口に入れたまま首をかしげた

「今日の正午にうちへ来るって」

「一体何の話だろ？？」

そう考へているうちに時は正午

シドウは扉を開けて入ってきた

「元気そだねスバル君」

「ええ」

「ミソリちゃんも明日には退院?」

「はいでもしばらくは松葉杖ですけど」

「で話つてなんだよ?」>

ウォーロックが割り込んできた

「もう少し見の弁えを教えなきや いけませんね」>

突然シドウのハンターから声がした

「げー! アシッド

アシッドと呼ばれたウィザードは人工電波生命体である

ウォーロックは少し苦手

「話つてこつのは昨日この病院でスバル君の体を調べたせいでわざつた」

「え? 僕の体を?」

スバルは驚嘆を上げただがミソラもウォーロックもスバルの体を調べていたなんて事も知らなかつた

「で、何があつたんだよ？」

「結果……」

シドウは空氣が変わる一言を言った

「ベイサイドシティの遺跡で発見されたPGM……すなわちスバル君と融合したPGMは

スバル君の体内に入つてしまつた

vvv 「…………」 vv >

その場にいたスバルたちは驚きの顔を見せた

「それってスバル君と融合しちゃつたから体内に入つたんですか？」

ミソラが質問した

だがシドウは首を横にふつた

「昨日スバル君にはエースPGMと周波数が一致していて共鳴しました……といったな？」

「はい、確かに昨日そういいました」

「だが昨日また確認したらエースPGMと融合していたのはあなたがち間違いではなかつた」

〈何が言いたいんだ？〉

シドウは息を一つ吐いた

「融合していたのはスバル君本人だつたつていうことだ」

「え？」

意味が分からぬ質問に首を傾げる

「エースPGMが融合したつて言つのは正確にPGMが更新されてしまい

エースPGMではなくなり新しいPGMになつたていう事だ」

「じゃあ今後エースPGMを使う=その暴走したPGMをつかうつていう風になるんですか？」

話が分かつていなくとも質問してみたミソラ

「ああ」

「じゃあ結論を言つと・・・PGM自体は融合されていなく更新されただけで

融合したのはスバル自信・・・って・・・・じゃあスバルは

!—^

考えていた顔が一変し口を大きく開いた

矢星河スバルは電腦竜の一部になつてゐるわけです^

最後はアシッドが言つた

部屋に沈黙が流れる

「まああせる」とじやない まだPGMを取り出す術は残つてゐる

「やつですね」

「あと良い忘れたがそのPGMを使って電腦竜

を復活させよつとする組織が動いている

「またか・・・・・・・」

「戦うのか・・・・・・・」

皆が考え込んだ

三回も世界を救つた英雄にまた戦いが起つるとこ・・・・・・

「僕が話す」とまゝれでおしまこ けだPGMはもつひとつある組織は

それを使つてくるかもしけん ファイナライズはジョーカーのほう

でしても大丈夫だ

シドウは言ったことは全部まとめて言い部屋を出て行つた

「なんか大変なことになっちゃったね」

＜平和は短いね＞

ハープが溜息を混じらせながら言った

## 退院と修学旅行

シドウと話した翌日スバルとミンラは心置きなく退院した  
ミンラはギプスをつけたままだが普通の生活には問題ない  
と本人は言つてゐるなぜなら・・・

「スバル君、しっかり肩つかんでよ」

「い、いや幾らなんでもこれはくつつきやすめじゃ・・・」

ミンラはなれない松葉杖での歩行にスバルはサポートしている  
普通の生活には問題ないところのはじの事である

「あ、もうこんな時間だよ 早く学校にこいつ」

「一人とも朝からラブラブね〜〜〜

あかねの冷やかしを耳に入れる暇は無くスバルは家を出て行つた

学校に着いたのは始業開始ぎりぎりの時刻であった

「ふ〜〜〜、疲れた」

「ありがとねスバル君」

「士士士」

学校に着くと色々な人がひそひそいつているのはスバルも承知して  
いた

時間になつたのか担任の育田先生が教室に入つてきた

みんな、おはよう。今田は連絡が一つある。

「つまむハシの座れとこり」とであった

「一つ目は今週の修学旅行の行き先が決まった」

「...」

教室全体が驚きの声になつた

「なんだ？修学旅行つてこんなに盛り上がるものなのかな？」

ウォーロックはこの空氣を分かつていなかつた

「どこ行くのかな？」

隣のミツラがつぶやいた

「私は行ける所ならどこでもいい気がする」

「修学旅行に行き先は……京都に決まった」

「 「 「 「 「 「 京都……? ? ? ? ? ?

全員が声を大きく上げた

小学校六年生の修学旅行が京都なんてなんとも贅沢である

「それじゃあ班決めは白金に任せる」

そして一時間目の班決めとそれ以降の授業が終わり

今スバルとミソラは帰りの路地にいた

「委員長とミソラちゃんとゴン太とキザマロと同じ班か

くなんかいつものメンバーじゃね？」

そもそも出来すぎた班であった

委員長は好きな人達と組んで良いとたった一言で終わっこいつ構成になった

(買い物の荷物持ちにされる・・・)

決まった瞬間スバルはそう思つた

ミソラは男子から何人もの誘いを受けたがかわいい微笑で全員黙殺してしまつた

「家に帰つたら荷物の準備しなきやね」

「 そ、う、だ、ね 」

## 退院と修学旅行（後書き）

実は僕の小学校時代修学旅行の行き先は東京でした  
中学校で京都です

## 古都京都の旅 ～當田にきなつ～

退院から一週間スバルはいつも通り元気よく登校してた

だが今日は特別な日であつたなぜか・・・・・

それは当田修学旅行當田だからである

「ん～～～～～、今何時だ？」

「7時20分」

突然ベッドから起き上がり眠たい目を擦りながら時計の

時刻を確認しようとしたスバルにウォーロックが丁寧に教えた

「へ？7時20分？」

「さうだぜ。あと15分で集合」

「うそ……早くしないとそれより遅くなるよ？」

「うそはおふくろと一緒に先に行つた 10分前に

余裕のウォーロック

スバルは昨日用意しておいた旅行かばんをリビングにもつて行き

朝飯を食べた

「ウォーロックは何で起してくれなかつたんだよ？」

そいつ辺にあつたパンを口に入れながらスバルは言った

く悪いけどおれは何回もお前のところを起したぞ

でも余りに気持ちよれやうだつたから起きる気配がなかつた

「そんなに熟睡してたのかよ～～」

くあと10分く

「ああ……いそがないと」

スバルの家から学校まで走つて行けば10分足らずである

「よしここづ」

スバルは家を出た

学校に着くと集合場所であるグランドに入る気配が全く無い

「あれ？まさか……遅刻？」

するとスバルのハンターから一通のメールが来た

「誰だよ、こんなときこ」

送信者はミソラであった

『おはようスバル君。実はね皆集合した時間が早くて出発の10分前にもうでちやつたの

もし遅れちゃつたら直接京都まできてね』

「出発の十 分前・・・・・・・・・・・・・・

くおふくろ達が出て行つたのはスバルが起きる15分前。で、出発が

予定の10分後つて言つことは・・・・・・・・

「僕が起きた時間にもう行つたと・・・・・・・・

スバルはその場につなだれた

く電波変換してコスモウェーブ通るか?・・・

ウォーロックのナイスな提案だがスバルはあっさり拒否した

「電波変換は禁止でしょ。なんどよりによつて・・・・・

考え込んでいる二人の間に春風がピューと吹いている

「じょうがない。シドウさんに頼むか

くそれしかないな>

二人はため息をついた

古都京都の旅 ～当田しきなり～（後書き）

駄文ですよ

「よくやつたぞ、レウン。まことに、PGMで電腦竜の復活が近づく」

(おれは言われたとおりにやつただけなんだけどな)

組織の秘密基地にメンバーが集まっていた

「でもそんなちやうじ一PGMで電腦竜を復活させることは出来んのか?」

「これはまだだ。復活させるこはまだ飛び散ったPGMが必要」

「なんだ? そのPGMって何のよ」

ふと質問してきた巨大な体の男赤髪の男であった

「能力破壊」これは京都にある・・・

「京都・・・・」

そうつぶやいたのは紫の髪の女だった

「やういえば姉ちゃん一回京都に行つたことがあるよな」

レウンがやう呼んだのであれば紫の髪の女はレウンの姉であつた

「ああ」

「では今日は誰が出向するんですか？」

幹部のゼオルが質問してきた

「今日はPGM自体・ウイザードや電波変換した奴の能力を破壊するものだ

今回ばゼオルとサジルに任せる」

サジル・・・・・赤髪の巨体男とゼオルが頷いた

二人は早急に準備に取り掛かった

（）WAXA（）

「やつぱり奴らが動き出したか・・・」

WAXAの研究室でシドウが呟いた

「やはりまた起きるのね」

隣り合わせにいた老人・ヨイリーが言った

「スバル君のPGMを狙つてくる・・・・・」

「それはない。組織はまず飛び散つたPGMを採取するはず

でもそのあともスバルちゃんが狙われるけどね」

「一刻も早く手を打たなければ・・・」

田町地（後書き）

今日は短めです

古都京都の旅 ～発見～（前書き）

おやが単身赴任するため一気に投稿します

## 古都京都の旅 ～発見～

寝坊して畠においていかれたスバルは指導に連絡をとつたが

応答せぬまま鉢合わせしたアマケンの所長天地守にたのみ

高速ウェーブライナーに乗つた

「いや～～～一時はどうなるかと・・・」

く寝坊したのは誰だよ・・・

「元してもすじにな～～高速ウェーブライナーは

今スバルたちが乗つている高速ウェーブライナーは通常のウェーブ  
ライナーの

3倍のスピードで走る

く京都には後どれぐらじで着くんだ?」

「25分くらい」

時刻表を見ていつた

くくは～～～～やることねえな～～

「僕は仮眠するから」

「はいよ」

スバルは仮眠へと入った

一方一足先に京都へ着いていたミソラ達はすでに観光を開始してた

「もー星河君たら何やつてるのかしら」

ルナは少々怒り気味である

「あ、スバル君からメール」

ミソラがハンターを取り出し送信者を見ていった

『いま、そつちに向かっているからもうひとつだから待つて』

「だつて」

「もしかしてロックマン様できたりして」

ルナは勝手な妄想をし始めた

「こいつや期待しないほうが良いですね」

後ろでキザマロが言った

「そうだな」

ゴン太も同情のようだ

「「ひー…あんた達ひそひそ話していないで行くわよ

「「はーー」」

そしてスバルは・・・・

駅を降りてすぐさま自分の班が向かっている場所へといった  
くまづどっから行くんだ?>

「今のは・・・・三十三間堂だ」

宇宙人であるウォーロックは全くそこがどういう場所なのか想像も  
できない

「とまあず駅から近いから行こ」

そして東の方向へ歩いてくと古い建物が見えた

「「ひーが三十三間堂だよ」

すると入り口に数人の男女がいた

「あー・スバル君」

その集団はソラ達であった

「ちよつと星河くん…!…遅刻するつてどうこいつと一緒に…」

「いいじゃねえか合流できたんだし>

ウォーロックの言葉にルナは静まつた

「どうあえず次のところに回りましょ」

ミソラがそういうとスバルはあることに目が行つた

「ゴン太たち何その荷物」

みるとゴン太とキザマロは紙袋やらなんやらで両手が塞がり自分の荷物が持てない状況であった

「委員長とミソラだな」

「たしかに・・・・・いやな予感がする・・・」

やつとのことで休めるかと思つたがミソラとルナの買い物で再び疲労が蓄積するスバルであつた

そしてスバルが京都に着いたころ一人の男も京都に来ていた

「おーーーーー二が京都か」

赤髪の男サジルが興奮気味にいった

「少しおじとやかにしてくださいねサジル」

その横でゼオルが注意した

グロー・カーの一人は任務とはいえ怪しまれる格好はせず一般人の服装でいた

「さて、その能力破壊アビリティブレイクとか言つPGMを探しますか」

サジルはミカルから貰つた小型端末機を使い探し始めた

「なあゼオル。この端末の情報に要注意人物つてあるじゃん」

「それがどうかしたんですか?」

「そのところに、ロックマンが入つているんだけどこんな場所にいるのか?」

画面に映し出された写真はロックマンと星河スバルの写真であった

＜ウォーロック・・・・・＞

「このウィザードのことか?レグルス

ゼオルにレグルスと呼ばれたウィザードはハンターから出てきた

その体はFM星人と同じ体の一部に電波を持つていた

「こいつは俺と同じFM星人だった。まさかこんな小僧についていたとはな

「でもこんなところにいるんか?そんな奴が・・・・・」

「本物がいるんじゃあ確定せざるを得ないでしょう

ゼオルが指差した方向には三十三間堂に繋がる横断歩道を渡つてい  
る少年であった

「まじ？」

古都京都の旅 ↗発見↗（後書き）

三連休中には戦闘編も入れたいです

## 番外～ターゲット～（前書き）

タイトルにそれほど意味は無いと思います

## 番外／ターゲット

スバルたちが京都にいる間ヨイリーたちWAXA研究部は電脳竜の  
PGM

で暴走してしまったスバルのために制御できるPGMを作っている

「やはり難しいものね」

田の前にある無数の「コンピューターを相手にキーボードを滑らせて  
いる

「どうですか。ヨイリー博士」

階段から降りてきたシドウが言った

「なかなかできないものね。周波数が合わない他のPGM使いたい  
けど

電脳竜サイバードラゴンはもともと電脳世界を破滅に陥る

ものだったから

「そのことなんですが」

シドウはそっと耳打ちをした

「えー？ グローカーが能力破壊を？」

シドウの言葉に驚嘆を上げた

「ええ。しかも僕は気づいていなかつたんですがやつりは京都に向かっていて

スバル君たちも今京都にいるんですよ」

「まさか・・・・・」

ヨイローは考え込んだ

「もし奴らがスバル君の体の中にPGMがあると知つたら・・・・・

先日のこと再び電波変換すると負担がかかるへなるところ」とも分かつていた

「じゅあ。早くPGMを完成させなきゃね

「ようしへお願ひします」

古都京都の旅 ～探し物～（前書き）

今日一日で6話へりこ ciòします

## 古都京都の旅 ～探し物～

三十三間堂で合流したスバルは次の目的地清水寺を筆頭にいろいろな場所を回った

そして時間はお昼になりました

「やあやあお昼こしまじょ、」

先頭を歩いていたルナは後ろを振り返り提案した

男子集団は女子の買い物の荷物もちで付きまとわれ

くたくたであった

「さんせーーーい

「たしか・・・この近くに・・・おいしいお好み焼屋さんがある  
らしいですよ」

キザマロは息をぜえぜえ吐きながらいった

「じゃあそこで食べましょ」

ランチタイムを終えたスバルたち一行は次なる目的地へと向かった

その行き先は一条城であった

「へえ～～～～」が一條城か

松葉杖をつきスバルに支えながら歩いていたミソラが言った

スバルが持っていた荷物は全て近くのロッカーにしまいこんだ

「ほんとだね。僕達が生まれる前からあるなんて」

スバルも同感した

だがミソラがそんなことに同情するなんてのはどうでもよかつた

一人の体は密着していくまるで恋人のようであつた

そんなことはスバルは全く気が付いていないのが悲しい

くん? まだ>

「どうしたの？」

く駅を降りてからずつと変な電波を感じるんだ。>

ウォーロックの視線が一条城へと向けられた

くあそこから感じる――行くぞスバル!――>

ウオーロックはスバルをおいていき中へと入つてしまつた

「え？」

ミンラに背中を向けた

背中に乗れという意味でスバルは向けた

ミンラはその行為に頬を染めた

しばらく考え込んだがやむを得ず背中に乗つた

そして一ノ城へと入つていった

「あ～～あ、どこにもPGMなんてねえじゃねえか」

アイスを片手に持ちサジルは文句を言った

「そり簡単に見つかるもんじゃないですよ」

端末機を持ちながらゼオルは空を見上げた

春の京都はサクラが満開であった

くまで・・・・・>

突然レグルスが止めた

「この近くに変な電波を感じる・・・・・」

視線の先は一ノ城であった

「ん? 二条城?」

「サジルいきますよ」

二人は二条城へといった

古都京都の旅 ～探し物～（後書き）

古の煙新します

## 古都京都の旅 ～見学～

「一条城の中に入ったスバルとミソラはそのままに見とれてしまった

「す、いや~~~~~」

「おいスバル、ボケッとするなばあさんからメールだぞ」

ウォーロックの言葉にスバルはメールを見た

『組織の奴らが京都にいるわ。 電脳竜を

復活させるためのPGMを探しに来たらしく やつらはロックマンの事は

知つてると想いつから電波変換を許可するわそれじゃあ気をつけた

「厄介だな・・・」

「なんだろ? PGMって僕がとったのと同じものかな?」

「いいじゃねえか何でも。電波変換できるんだし」

「スバル君どうしたの?」

ミソラが突然話しかけてきてスバルは吃驚した

「うんうん、なんでもないよ」

「それじゃあ早く行きました」

「WAXA」

「ふ～～～やつといた」

「パソコンの前で一息ついたヨイロー田の前にま

ひとつのがある

「できたんですか、博士」

「ええ、なんとかあとはスバルちゃんたちが使いこなせるようになるだけ」

「時間の問題ですね」

「そうね・・・」

「キズナ・・・強力なPGMを制御するもの」

シドウは感嘆の言葉を言った

「あの一つのPGM・・・・アルタイルPGMとユニバースPGMを制御するにはこれしかない」

古都京都の旅 ～見学～（後書き）

乱暴に書き収めました

## 古都京都の旅 ～組織の電波変換～

すばるたちがにじょうじょうに入つてから数分後ゼオルとサジルは  
二条城の裏庭にいた

「二条城から電波を感じる」

「確かに端末機からの反応が強い」

「せつさと中に入つて取り出せつぜ」

簡単そうで難しいやり方にゼオルはあきれた

「サジル。これは世界遺産ですよひび一つでも入れたらそれでこそ  
我らの存在がばれます」

「じゃあどうすればいいんだ?」

「電波変換さえすれば建物を通り抜けられる」

レグルスが言った

二人はうなずきハンターを掲げた

「アナザーコード、レグルス・ナイト!」

「電波同調!」エレクトロニクロラウル・ゼアス!」

一人はウェーブロードに行き二条城の上へといった

そしてスバルたちは一ノ条城を見学している

「やつぱすげーな」

「ゴン太君さつきからすゞいすゞいばつかですね」

「いいじゃねえか。すゞいんだから」

「ブルルルル、すゞいぞ」

ゴン太のウイザードオックスもすゞいといつている

流石に昔から作られた建物だけであって木の匂いもそれなりである

スバルが周りを見回しているとウォーロックが声をかけてきた

「スバル。お楽しみのところ悪いが気配がする」

「あら、ウォーロックも気が付いていたのね」

ミソラの相棒ハープが言った

二人は何かを感じたらしい

だが周りを見てもそこは思えない

すると建物の中から奇妙な格好をした一人が上空に現れた

「なんだ・・・あれは」

一般人が驚き逃げていった

「あれは・・・電波変換?」

「なんにもしてねえのになんで逃げるんだ?」

建物の上でラウル・ゼアスが言った

「ゼオルさつをとどりに行きましょう」

「待て、」

一人の真下に何人かの少年少女がいた

「あれは・・・星河スバル?」

「ウォーロックにハープ」

「お前と同じ例のＦＭ星人か」

「ああ」

「丁度良い機械だから手合わせをするか

「チツ、レグルスのやうつか」

「レグルスは厄介ね」

「二人ともやつから何を言つてゐるの？」

「人がぶつぶつ言つてゐることにスバルは気になつて仕方が無かつた

〈あそこにいるオレンジのウェザード……FM星人だ〉

「どうする……電波変換の許可は出てるけど……」

〈やるつきやねえだろ！…〉

「スバル君電波変換するの？」

ミンラが恐る恐る聞いた

「まだ完治していなかから蓄積する量は多い。出来るだけ早く片付ける」

「サジル、能力のほうは任せた俺はあいつと戦う」

「いくよ……ウォーロック」

〈よつしゃ人暴れするぜ〉

「トランスコードー・シユーティングスター・ロックマン」

ロックマンはウェーブロードを駆け抜けた

古都京都の旅 ～戦闘開始～（前書き）

一時間かけて書いたデータがPCフリーズして消された・・・

## 古都京都の旅 ～戦闘開始～

「グローカー」

WAXAの司令部室の衛星モニターでスバルたちがグローカーの奴らと戦う場面が見られた

(今度の敵もかなりだ早急に遊撃隊を結成しよう)

するとヨイリーが入ってきた

「博士！..実験のほうはどうでしたか？」

「かなりの力パワがあるわあとはスバルちゃんの力次第よ」

「そうですか」

「相手はまだ大きな策は打つてきていないわ準備はゆっくりやりましょう」

「はい」

シドウは司令部室を出ていった

「エクスプロージョン鬼神化・・・・・恐ろしいものだわ」

場所は二条城

ウエーブロードを駆け抜けたロックマンはレグルス・ナイト「以下

ナイト」

の着いた

「おまえら……何してる……」

「ほへへ～」れがロックマンか

ゼオルが関心の声を上げた

「久しぶりだなウォーロック」

「お前だつたかレグルス」

二人は長い間あつていなかつたようだつた

「お前らはなんなんだ」

「我らはグローカー。そして私の名はゼオルグローカーの幹部である」

「シドウが言つていた組織つて言つ奴か」

「お前らは電脳竜サイバードラゴンを使って何かをするのか？」

「察しが良いな、そうだここに電脳竜サイバードラゴンを復活させるためのPGMがあるんだ」

「それでなにするつもりだ」

「悪いがこれ以上いえない・・・戦いに来たんだろう? だつたらやるつじやないか」

「やれりつこきなりの話題転換で>

ゼオルが体勢を整えた

「ウエーブバトルライド・オン」

「スバル君大丈夫かな」

「ミンクは心配そりて言つた

「大丈夫よロックマンさまなら」

(私もこの足をえ怪我していなきやな)

「ミンクは心の中でそう後悔していた

「みんな下がるんだ」

電波変換したゴン太・オックス・ファイアが回り込んだ

「みんなでスバル君を応援しましょう」

パニックに陥った二条城は閑散としていた

「行くぞ!!」

「こい」

ロックマンは地面を蹴り攻撃を仕掛けた

「バトルカードワイドウェーブ！！」

横幅の大きい波がナイトに向かって放たれた

だがそれを簡単にかわしてしまった

「はやい」

「どうした地球を二回も救つたヒーローの力はその程度か」

普通の姿でいるときと違つ口調で喋つた

くウォーロックよ、貴様も大分動きが鈍つたな

く余計なお世話だ、次行くぞスバル！！

「バトルカード、マッドバルカン」

無数に放たれた銃弾はナイトが避けきれないほどあったが

火で消し去ってしまった

「炎属性か」

「今度はこちららか行くぞ。火炎柱」

ファイアーウォール

ウエーブロードを突き抜ける火はロックマンを襲つた

「スイゲツザン！！」

だがロックマンも対抗して火を消した

「なかなかやるな。だがこれはどうだ」

突然姿を消し辺りを見回し現るかと思ったが来なかつた

〈スバル外だ！！〉

ロックマンは一條城の外を出た

〈上だ！！〉

見上げると両手を振りかざしているナイトがいた

「火炎鉄槌！！」  
フレイムスタンフ

頭上から火炎のハンマーがロックマンを襲つた

「うあああああああああああ！」

吹き飛ばされたロックマンは猛スピードで落下して行つたが

ぎりぎりのところで着地した

「強い・・・」

「ああ確かにやつは強い。FM王の隠れた右腕とも呼ばれていたからな」

「ケフェウスの……」

「休憩時間は終わりらしい」

目の前にナイトが現れた

「あれを喰らってまだ立っていられるとはたいした奴だ」

「こんなところで倒れたくない」

「往生際が悪い……フレアバースト爆熱砲」

「スイゲツザン!!」

炎属性に相性の良い水属性の技でも威力が大きすぎて防ぎきれない

「はあ、はあ、はあ、」

「くやつぱりダメージが大きい……あれを使うしか……」

「まだやるのか?」

「スバル、ファイナライズだ」

「え? でも暴走するんじゃ……」

<ばかやう。ジョーカーPGMだれなら暴走せずに済む>

ウォーロックの言葉に多少疑惑が合つたが迷わず頷いた

「あいつら何をするんだ？」

<なんだつていい何かをしてかす前に仕留めれば問題は無い>

「そうだな。初対面で悪いがここで消えてもうう。」

ナイトは両手に気を溜め始め大きく振りかざした

「ボルケーノウェーブ  
煉獄波！！」

振り下ろした両手から巨大な火炎が出てきた

古都京都の旅 ～戦闘開始～（後書き）

夜一話くらっこります

古都京都の旅 ～戦闘開始～（前書き）

親がなぜかPICOを買ってきて更新できるようになります

## 古都京都の旅 ～戦闘開始～

巨大な火炎がウェーブロードを突き進む

「行くぞ！！スバル」

「ファイナライズ！！」

スバルがそう言い掛けたのと同時に爆発した

その爆発に気づいたミソラ達は外にいた

「おいスバルの奴大丈夫か」

「大丈夫よ未だ電波は残っている」

「よかつた」

ミソラが安心そうに言った

「さてサジルのところへ戻るか」

爆発を背に歩んでいった

だが火の中から声がした

「俺達がこんなところでくたばらねえぞ」

煙の向こうにはファイナライズしたレッドジョーカーがいた

「ボルケーノウェーブ  
煉獄波を受けながらもファイナライズするとは」

「まだ勝負は決まっていない」

「なるほど。一発で決めるっていうわけか」

ナイトは口元でフツと笑った

そして二人は同時に地面を蹴った

「RGレイザー！！」

「フレイムフレイド  
爆炎刃！！」

双方の攻撃がぶつかり合ったウェーブロード一帯に再び爆風が巻き起こった

ミソラ達はただそれを呆然と見てているだけであつた

煙が晴れると一人は膝をついていた

「なるほど・・・やはり戦車の如き技だな・・・」

「あれでも倒れないのか」

息を切らしているのは力がそれほど残っていないだらう

そのぶつかり合いにサジルが割り込んできた

「ゼオル、あのPGMはなかつた・・・・あの電波は古代の電波  
だつたから

似ていたかもしねない」

「・・・・・そうか・・はあはあはあ・・・今日は撤収だ

ロックマン貴様との勝負はまだ終わりじゃないぞ」

グローカーの一人はウェーブロードから消えた

く厄介な連中だつたな・・・・・

「相当な力を使つたよ」

スバルはウェーブアウトした

地上に降り立つたスバルのもとにミソラ達が走り寄ってきた

「大丈夫だつた?スバル君」

松葉杖で頑張つてきたミソラは聞いた

「うん、なんとか」

「もう一時はどうなるかと・・・」

ルナがほつとしたように言つた

<グローカーか・・・・今後何しでかすかわからないわね>

「ひとまず戦いは終わつたね」

「今日はもう遅いわねホテルに戻つて休みましょう

クラスのみんなはもう帰つてくるはずだよ」

ルナはハンターにある時計を見ていつた

スバルたちは一 条城を後にして宿に向かつて帰つた

京都の夕焼けはコダマタウンの夕焼けよりもきれいだった

古都京都の旅 ～休戦～（前書き）

今日から後書きを長くしたいと思います

## 古都京都の旅 ～休戦～

ホテルに戻ったスバルたちはホテルにチェックインしそれぞれ部屋に戻った

「だあ―――つかれた」

ゴン太がその場に座り込む

「ほんと今日は疲れましたね」

「今日の晩御飯なんだろ?」

「今日はハンバーグらしいですよ」

「おお!...まじか!...」

ハンバーグと聞いて突然ゴン太の目が輝いた

「それより着替えよう」

スバルたちは着替え始めた

そしてスバルは一人よりも着替えを早く済ませ空を眺めていた

〈冴えない顔だな〉

ウォーロックが話しかけてきた

「うん。今日の戦いを見ているとまた始まつたのかつと思つかう」

くたしかに・・・・・サイバードラゴン電脳竜を使って何をするかわからねえが

また世界が危ないのには越したことじやない」

「わうだね

くとつあえず今は修学旅行を楽しもうぜ

「珍しい。ウォーロックがそんなこと言つなんて

くケツ、俺にはたまには休戦しなきゃな

スバルは微笑んだ

「お～～～いスバル君、こ飯食べに行きましょ～～～

後ろからキザマロ達の声が聞こえた

「わかった

スバルは部屋を飛び出した

スバルたちが部屋にいた「ヒンラ」とルナも着替えていた

「今日もいろんなことがあったね

荷物を整理していたルナが言った

「ハントはすでに着替えを済ませておつ星空を眺めていた

「また始まるのか……」

「元気ない口調でつぶやいた

「じつだらつ……でも今日のロックマン様との戦いを見ているとそんな気がするわ」

ルナも同じように感じていた

また世界に危機が訪れロックマンであるスバルが遠くへ行ってしまつたことが

(ルナちゃんもスバル君のことがやつぱり好きなんだ……)

とハントは驚いてしまつ

「ハントはつまものか……」

「ん? なに?」

「うそうなんでもない それより『飯食べに行つ

松葉杖をゆっくりつっこむハントは歩き出した

クラス全員で食べる食堂には豪勢な食事が並んでいた

「うわ～～～～～」

「ゴン太君、まだ食べちゃ いけませんよ」

余計な手出しをしようとしたゴン太にキザマロがとめた

「とりあえず席に着きましょ」

ルナにせかされ席へ着こうとする

が、そこに何人かの男子が集まってきた

「ねえ、ミソチちゃん一緒に食べない？」

「話しながら食べよ」

など大人気国民的アイドルと一緒に食事をするなんて滅多に出来ない為狙つたのだろうか

「こめんね、私班の人と一緒に食べるから」

その一言で誘いをばっさり切り捨て席へと向かった

「よーし全員そろつたなじやあいだきますをするぞ」

先生のいただきますの合図とともにみんな食事をとり始めた

あまりないクラス全員の食事がスバルは全く楽しくなんか無いはずがなかつた

そしてお皿に盛られた食事は何も残らずきれいにぱりなかつた  
楽しいひと時が育田先生の御馳走様のあいさつで終わつてしまひ

またそれぞれの部屋に戻つた

＼＼＼＼＼グローカー＼＼＼＼＼

「ミカル様、例のPGMの反応が一条城にあり調べたんですが似た電波だつたようでした」

代表としてゼオルが言つた

「そつか・・・だがまだ作戦は実行したばかりだ。焦ることはないぞおまえら

・・・・能力破壊アビリティブレイク、電波破壊ウェーブブレイク、精神破壊ソウルブレイク、記憶破壊メモリブレイク・・・  
」の四つのPGMがあれば電脳竜サイバードラゴンが・・・・

「しかしミカル様、電脳竜は歴史上二体いたといわれています

一体しか復活させないのは何か策があるんですか？」

「もう一つのアルテレギオンのPGMはロックマン・・・・星河スバルが持つてゐる

「星河スバルだと？」

サジルが突然声を上げた

「なんだ？知っているのか？サジル」

レウンが聞いてきた

「知っているのも何も今日ロックマンがゼオルと戦っていたぞ」

「え！？」

「ほんとうかサジル」

「おっしゃる通りです」

ゼオルが小さくうなずいた

「ボス、これは早く手を打った方がよくねえか？ロックマンがPG  
Mを持っていれば

あぶねえぞ」

「……………そうだな…………だがまずはPGMを探さなく  
ては意味がない」

ミカルは小さく苦笑した

## 古都京都の旅 ～休戦～（後書き）

はい・・・・・なんか意味の分からない文ばかりですいません。  
・・・

駄文の中の駄文ですね

こりやひどいわ・・・・・・・・・・・書くのって結構疲れますよ  
ね・・・

手がしんどいです

今日の本編では能力破壊　電波破壊　精神破壊が出てきましたが

新たに記憶破壊を入れました

一応今のところは一番危ないPGMです

はいその名の通り記憶を消してしまつPGMです

電腦竜のイメージはもつ全てを破壊する事しかできない電腦竜と思  
つてください

はいこんな駄文続きの物語を最後まで楽しんで頂ければ嬉しいです

## 古都京都の旅 ～思い～（前書き）

こんですへへ今週は三連休なので結構更新できます  
今までの内容と一致していないと思いますが何とか修正しながらや  
ります

今の所劇場版も考えていますww

## 古都京都の旅 ↗思い

夕食を食べ終えたスバルたちはそれぞれ自由時間となり  
みんなテレビを見たりトランプをしたり女子の部屋を襲撃したりと  
いう事をやつていた

ゴン太とキザマロはお風呂に入るといいスバル一人が残された

〈なあスバル〉

「なに?」

〈俺たちも風呂入りにいこーゼ〉

星空を見飽きたウォーロックはスバルに言った

「やだ。」

スバルは即答した

〈即答つて・・・俺は退屈だから外に行くわ〉

ウォーロックはハンターから出て外に行ってしまった

「もう・・・」

するとハンターから一通のメールが来た

送信者は//ソラであった

「あ~~~~~退屈だ~~~~~」

部屋の真ん中でぼやいている//ソラ

ルナはお風呂に入るところ//ソラひとりであった

くせつからくの修学旅行なんだからスバルを誘つて散歩したら?>

「やうか・・・修学旅行だからね」

くいっその事告白したりうなの?ウォーキングの方は私が何とか  
するから>

突然の発言に//ソラはびっくりした

「な・・・なにいってるの?...そんなことできるわけないじゃな  
い?」

混乱している//ソラにハープは忠告した

くだつて考えてみ、今告白しないでいっするの?この前だつてしそ  
こねたじょん

ああみえてスバルつてモテるかもしけないんだよ?>

「でも・・・私が告白してもスバル君がビックリするか?・・・

くそんなのやつてみなくちゃわからないでしょ！…まあ早くメール送つてよ>

「もう強引なんだから」

そう言いながらミソラはスバルにメールを送つた

旅館の入り口でスバルはミソラを待つていた  
メールの内容はこうであった

『少し散歩しない？ 旅館の入り口で待つてて。すぐ行くから』  
という内容であつた無論スバルは何もすることがないので旅館の入り口にいた

数分後ミソラが松葉杖をつきながら来た

「じめんじめん、少し遅れちゃつて」

「大丈夫だよ。それより足だいじょ？」

「うん。大丈夫だよそれより行こ」

二人は旅館を出た

京都の春は夜になると少し冷え込むためスバルとミソラは上着を着ていた

「寒いねー」この夜は

道路沿いを肩を並べて歩く二人最初の言葉はスバルが言った

「ほんと、コダマタウンとは違つね」

春といつ季節でも一人の吐息は白い

二人が歩いている道は誰もいなく今は静まり返つている

(今しかない、告白するには今しかない)

そう心に強く打ちこみチャンスをうかがつた

途中ベンチがあり一人はそこに座った

スバルは星空を眺めているだけで話していく気配はなかつた

そしてミソラは今しかないと判断し話しかけた

「ねえスバル君？」

「なに？」

心の準備しかしておらず何を言えばいいか考えていなかつたミソラ

は口もつてしまつた

「や、そのスバル君て私がこの世からいなくなつたらどう思ひ?..」

適當なことを言つてしまつてんぱつてしまつた

(わあ!..何言つてるんだ私!..)

だがスバルは嫌な顔一つせず答えた

「そりや、悲しむよ。一番最初のブラザーが突然いなくなつたら悲しいな

もしその前に伝えたいことがあつたら絶対後悔しているな

ミソラはその言葉ドキッとした

三回も地球を救つたヒーローがまた遠くへ行つてしまふのではないかと思つてしまつた

「私・・・・・」

ミソラは突然泣きだしスバルにすがり付いた

「え?..ちよつと・・・ミソラちゃん?..」

突然泣き出したミソラに驚いたスバルはどういった行動を

取ればいいのか分かるはずもなかつただ斯バルの服を掴む腕が強くなる一方だつた

「私・・・またスバル君がどこかへ行つたやつんじゃないかなって思つちゃったの

こんな質問してバカだね・・・」

「ミソラちゃん・・・」

スバルはそれを言つ事しかできなかつた

だが次の瞬間衝撃的な言葉を放つた

「私は・・・・スバル君が好きなの・・・・・・

私と付き合つてほしいの・・・・・

「えー?」

いきなり言われてびっくりしてしまつた

スバル自身もミソラが好きであつただがスバルが言つているすきはミソラがさつときつたすきとは全く違つものだという事は分かつた

「僕からもよみじくね」

スバルはそういうとミソラを優しく抱きしめた

古都京都の旅 ～思い～（後書き）

初めてのスバミン、結構むずいです・・・。  
この修学旅行が終わったら次はどの話にしましょうか

## 古都京都の旅 ～最終日～（前書き）

なんか前回の話は全くの馴文でした・・・・・・  
何度も書つと思ひますけど

これまでの話と全く噛み合つていなかもしれません  
指摘などあつたらよろしくです・・・

さて・・・本文です

今日は修学旅行最終日です  
一泊だけっていうのもなんですが  
一応これで最終日です

あ――！オリキャラも出ますからね――！

古都京都の旅 ～最終日～

ホテルに戻ったスバルとミソラは男女別々の部屋へと分かれる廊下で別れの挨拶をした

「じゃあお休み」

「うん・・・またあしたね」

ミソラは笑顔で言った

スバルは部屋へと戻るミソラの姿を見ているだけで姿が見えなくなると

部屋に戻った

~~WAXA~~

ヨイリーはモニターに映し出された地図を凝視した

するとそこに研究員が駆け付けた

「ヨイリー博士!! PGMのありかがわかりました。場所は・・・  
・です」

「そう・・・ほかのPGMの在り処は?」

「現在調査しています見つけ次第報告します」

「グローカーに見つからないようにね」

「はい」

研究員はその場を離れた

「一番危ないのは……記憶破壊ね」メモリブレイク

地図に映し出された場所は北海道であった

ヨイリーはアメロッパにある人物に連絡を取った

「アメロッパ」

とある広大な草原で一人の少年少女がその場に立ち尽くしていた

少年の手にはハンターがあり誰かと連絡を取っていたようだ

通話が終わったのかハンターをしまった少年は一息ついた

「久しぶりに日本に帰るのか」「」

少年の隣にいた少女は大きく伸びをしていった

「奴らが狙っているPGMは北海道にあるっていうからその応援だつて」

「でもコダマタウンっていう町にまず行くんじやん?」

少女が聞いた

「ああ、WAXAで遊撃隊といつもの結成するらしい  
だから学校もしばらくコダマ小学校つていうところに通うらしい」

「そこに星河スバルっていう人がいるんじやん？」

「そうだな……世界を三回も救ったヒーローがいるんか」

「確かに響きいいソラつていう子もいるんじやん？ 狙っちゃダメよハル  
ト」

ハルトと呼ばれた少年は少女に向かって呆れた顔をした

「誰が狙うだつて？ 勘違いするなよ!!オ」

「それもそうね」

一人は風になびく草原を見ていた

「星河スバル……」

ハルトはそう呟くだけだった

（京都）

珍しく早起きしたスバルは暇で仕方なかつたのでテレビをつけた  
どうやら昨日の騒動はそつでもなかつたようだつたのでニュースに  
はなつていなかつた

テレビを消したスバルは仕方なく昨日のことを思い出してみた  
グローかという電腦竜を復活させる組織、そしてその一人と戦つた  
こと

ミソラに告白されたことなどが思い浮かんだ

実質今日は修学旅行最終日であった

今日の予定は個人自由行動であった

時間内に集合場所に来れば京都府内どこにでも行つていいといつら  
しい

スバルはいつものメンバーで行くという事は予測していた

〈なあスバル〉

突然ウオーロックが声をかけてきた

「どうした？」

〈悪いけどちょっと外でていいか？〉

スバルは言われるまま外へ行つた

朝日が少し照りつけていても気温は低い

「どうしたの？外なんかに呼び出して」

「昨日ファイナライズをしたとき変な感じしなかったか？」

「いや……別に。でもなんだ？」

「メテオGが地球の軌道を外れてからファイナライズをすると何か違和感を感じると思ったが

この前のことがあるし……」

「だいじょだよ。エイリー博士がPGMを使えるように制御できる物作っているから」

「そりか……悪い」

そういうとハンターに戻ってしまった

「なんなんだ？」

スバルは首を傾げることしかできなかつた

部屋に戻つたのは6：15起床時間であつた

Gon太とキザマロはあぐいをしながら起きた

一人は皿をこすりながら着替え始めスバルと共に食堂へ行った

食堂に着くとすでにミンラとルナが席についていた

ミンラは昨日のことが何もなかつたように微笑ましい笑顔でいた

先生の合図で全員食事をとり始めた

「今日はどこに行く？」

最初の一言はルナがいった

「平等院鳳凰堂がいいです」

「却下」

キザマロに意見を早急に却下したルナ

「なんですか？」

反論するキザマロ

だが

「遠いからダメ」

の一言で撃沈してしまった

続いてミンラが意見を言った

「私、清水寺がいいな」

「あ、いいね」

スバルがミソラの意見に賛成した

「あと金閣寺がいいな」

こつじていき場所は金閣寺と清水寺に決まった

余った時間はお土産を買う時間となつた

自由行動なのに荷物持ちに使わされるのかと思つた男子一同

「よし……さつそく準備開始よ」

くその前に飯食わせろよ

ウォーロックの一言でルナは静まり返つた

そして朝食が終了しそれぞれの部屋に戻り準備しホテルを出た

## 古都京都の旅 ～最終回～（後書き）

まあ最終回といつよりその準備みたいなものですね  
オリキャラが出てきたんですがネーミングが微妙です・・・  
とりあえず頑張ります

## 古都京都の旅～自由行動及び帰宅～（前書き）

後2話で修学旅行編が終わります  
次回の話は遊撃隊が北海道に向かう話にしようかな～  
なんて。。。  
でも劇場版の話も考えないと  
ハルトたちが電波変換？した状態になつたら書こうと思います  
では駄文をどうぞご覧あれ

## 古都京都の旅 ～自由行動及び帰宅～

スバルたち一行がまず行った場所は金閣寺であった  
金閣寺はホテルから十分の所にあった  
敷地の中に入ると広大な建物が見えた

「　「　「　「おお～～～～～」　「　「

全員が絶叫した

「すげーや」

「わ〜回つてこましょ」

みんなそれ園内を回った

スバルとミソラは一番金閣寺が見える場所に行つた

「す〜い、水面に金閣寺が映つてゐる」

「ほんとだ、きれいだな〜〜〜

二人合わせて嬉しそうな声を上げた

周りから内密な関係になつていても一人はいつも通り話している

だがミソラにとつてそれは幸せなことだった

「向こうのお守りがあるらしいから買わない?」

スバルが提案してミソラはうなずいた

「うん……」

二人は階段を上つて行つた

売つていたお守りはいろいろな種類があつた

恋愛運、仕事運、金運、健康運、勝負運などのものがあつた

ミソラは仕事運のお守りと恋愛運のお守りを買つた

スバルも同じよつて恋愛運のお守りと勝負運のお守りを買つた

「おそろいだね!!」

ミソラ嬉しそうに言つた

「うん」

二人は顔を赤くしていつた

そしてルナ達と合流して次なる場所清水寺に行つた

清水寺からは三年坂を上つて行つた

「ここを転ぶと三年以内に死ぬらしいわよ」

パンフレットも何も持つていらないルナが言った

スバルは感心そうに言った

階段を上りお寺が見えてきた

中に入ると人がいっぱいいた

さすがに本物の響ミソラがいると通行人や見物人も絶えないであろう

だからそれについては対策済みであった

ミソチの服装は帽子をかぶりメガネをかけていた

外見からは分からぬほどの服装であった。

建物の中には書院、土蔵が多數いた。

「ね、一せりばり古いお寺だから壊れないように守りながら警備してゐるんだ

「けど昨日の戦いでよくあのお城壊れなかつたな」

「あれは自動的に防御装置が作動したからね」

## スバルが説明した

そしてスバルたちは記念撮影を取り余った時間お土産などを買つ時間がした

元気よく先頭を歩くミンラとルナの後ろで重たそうな荷物を持つている

男子集団は周囲の人たちから目立っていた

（～WAXA～）

「・・・できた・・・」これで完全に制御できるわ

「やつとですね」

シドウが深々と言つた

「サイバードラゴン電脳竜の力を制御するPGM・・・【キズナ】

これがあのスバル君のPGMと融合すればアルテレギオンの力を秘めた

ロックマンが暴走することはない

「アルテレギオン・・・それと対立するもう一体の電脳竜サイバードラゴン

奴らは何が目的で・・・なぜ一体のPGMしか狙わないんだ

「それはわからない・・・でも奴らがまた世界の存亡の危機の陥る事をするかもしれない」

「博士・・・ほかのPGMの方は・・・」

「すこぶる順調よ遊撃隊のメンバーに渡す予定も考えているわ

「そうですか。わかりましたでは北海道に出撃するための作戦を練  
つてきます」

シドウはさうこうひと部屋を出て行つた

PM3:00

集合場所である駅に時間通りついたスバルたちは

クラスのみんながいる場所へ行つた

「ふ〜〜〜、つかれた〜〜〜」

柱に横たわったスバルが言つた

「ホントあつという間だつたね」

「「ダマタウンに帰りたいような帰りたくないような・・・」

そう話していると集合時間になりクラス全員集まつた

「よーし、みんなそろつたな。一日間楽しめたか?」

これから家に帰るがウェーブライナーの中に忘れ物とかしないよう

に。特に牛島

「おれすか？」

「ああ、今日ホテルに時計を忘れていつただろ？うが」

先生がゴン太の時計を掲げた

「うげ！！」

もうだらしないわね

ルナが忠告した

すねと運びから日本にアライガードが来た

「よしじゃあ乗るぞ」

こうしてスバルたちの修学旅行は終わる

またグローかーと能力PGMをめぐる戦いが始まるのと同時に

空港

「ミオ！－！早く来いよ」

「ちょっと待つてよ……ハルト荷物少なすぎ……」

「お前が多いからだろ」

ハルトとミオは現在日本の空港に着いたところである

ハルトは旅行鞄を片手に持ちミオは旅行鞄+いろいろな荷物を持つていた

二人はウェーブライナーに乗って目的地へ向かった

「明日から学校行くの？」

「明日は修学旅行の振り替え休日だってだからいくのはあさつてから

「いいな～～～修学旅行、どこに行つたんだろ?」

首を傾げるミオ

そのよこでハルトは窓から見える景色を見ていた

「そんなんに星河スバルと会うのが楽しみ?」

ミオが聞いてきた

「別に・・・ただ今の日本も大変だなーって」

「サイバードラゴン  
電腦竜ね・・・私たち遊撃隊で参加か」

「なんか呼ばれたのに冴えない顔じゃんか、ミオ>

突然彼女のハンターから声がした 彼女のウイザードであろう

「いや遊撃隊で参加はいいんだけど学校になじめるかなって……

でもアクアスには関係ないじゃん！！」

アクアスと呼ばれたウイザードはクスクスと笑った

＜ハルトは学校になじめそうか＞

彼のウイザードも声をかけてきた

「うへへへへん、どうだろ？…………まあ向こうの人は仲良くなしてくれるだろ？から

心配ないし…………スコルピはほかのウイザードと仲良くなれそう？」

スコルピと呼ばれたウイザードは答えた

「向こうにはウォーロックとかいう宇宙人がいるからなまあ何となるだろ？」

「次は~~~~~WAXA日本支部前~~~~~」

アナウンスが一人の下車を告げる合図になつた

古都京都の旅 ～自由行動及び帰宅～（後書き）

あああああ・・・疲れますね  
なんか全然話がまとまらない  
これから先の話が心配です

## 一入（前書き）

以前思つたんですけどタイトルロゴ？みたいなものつて皆さんどうや  
つて作つていらつしゃるのでしょうか・・・  
自分絵という物には全く才能がないんで・・・・・

では本文

二人

「ダマタウンに着いたのは夜の5時くらいであった

ウェーブライナーを降り解散式をしてみんなそれぞれ家に帰った

「じゃあミソラちゃん帰ろうか」

スバルは重たい荷物を持ちながら言った

「うん」

一人は家へ帰った

「明日と明後日は休みか・・・ねえスバル君月曜日どっかいかな  
い?」

「え・・・別にいいけど。でも足はもういいの?」

スバルは包帯を巻いているミソラの足を見ていった

「だいじょだいじょ、スバル君に支えてもらえれば問題なしーー。」

「あーーでも月曜日病院行くんじゃなかつたけ?」

「・・・・・・そつだつけ?」

「とにかく明日は宿題をやつて明後日は病院に行かなきゃダメだよ」

「ちえーつまんないの」

ミツラはつまらなそうな顔をした

一人が話していると家はすぐそこであつた

スバルは玄関のドアを開けた

「ただいまー」

「おかれり！」

大吾とあかねが二人を迎い入れた

「たのしかつた? 一人とも」

「楽しかったよ、あ、あとこれお土産」

スバルは鞄から袋を一つ取り出した

「私からも」

「一人とも疲れただろ。お風呂入つて寝ちゃいなさい」

「一九」

二人はそれぞれ部屋へと戻つた

「JJJがWAXA日本支部・・・」

「ハルト早くはいる?」

ミオはハルトの手を引っ張りながら中に入った

指紋認証を行い中に入るとなつてもない広さだった

「す」「い・・・」れが・・・・

「よう」こそ、WAXA日本支部へ」

シドウが声をかけた

「君は・・・・・西蓮寺ハルト君だね?そっちが・・・・・ミオちゃん・・・彼女かい?」

突然ミオを彼女と言われ動搖してしまつ

「ち、違いますよ 幼馴染ですから・・・

「そうですよ・・・・・」

「ふ〜〜〜ん、まあ似たような一人もいるから

一人はその言葉に首を傾げるしか方法はなかつた

案内された場所はヨイリーがPGMを作つていた研究室であつた

「マイリー博士はいりますよ」

シドウが声を掛けたら部屋のロックが解除された

「初めまして……つていつも電話で話したわね」

「はい。アメロッパから来ました鳴無ミオです」

「同じくアメロッパから来ました鳴無ミオです」

そして一人のウェザードも出てきた

「スコルピだ」

「アクアスです」

「おお……アシッドと同じ人工電波生命体か」

「アシッド？」

「私のことです」

ハンターからアシッドが出てきた

「さて、話を始めましょうか……二人に来てもらつた理由は電話で話した通りよ

グローカーの<sup>サイバードラゴン</sup>電腦龍復活を阻止してほしいの

だからロックマン……星河スバルと一緒に協力してちょうどいい

「言わなくてもやりますーー！」

「じゃあ一人にまず任務……と言いたいところだが宿舎に行くつて荷物を整理しててくれないか？それで今日はゆっくり休んでくれ

「え？ でも任務とかいいんですか？」

「ああ、なんせアメロッパから来たからなそれにまだ遊撃隊を結成していない

「はあ」

二人は言われるまま宿舎へ行つた

ひろい

「ここで男女二人使うんか？」

「何？不滿？」

ミオの視線にハルトは殺氣を感じた

「とりあえず荷物の整理をつと・・・・・」

宿舎での生活は複雑なものになりそ�だとハルトは思っていた

お風呂に入ったスバルは夜風にあたっていた

「修学旅行あつという間だつたね」

「オレはこの家の方が落ち着くけどな」

山から月が出てきた

「ん？スバル、メールだ」

開くとジドウからだつた

『月曜日WAXAに来てくれないか？』

だつた

「行く？」

スバルが聞くとウォーロックは

「多分あのPGMを制御する物が作れたんだろう。行ってみようぜ」

「わかった。さて今日は早く寝るか」

「うひよ」

ミンラは自分の部屋がもうえたため今日からそこで寝ることになった

スバルは布団に入り寝静まった

一人（後書き）

うへへへんいまいちです

それとミオの名字は鳴無・・・読みます？

『おとなし』です

## WAXAでの生活（前書き）

今回はハルトとミホの話です（スバルの話はネタがなかつたんで…。  
かじどんな話になるでしょう

・・・・劇場版何にも書いていない・・・・onz

## WAXAでの生活

日曜日、今日から遊撃隊の訓練かと思った一人・・・だがその前に戻り<sup>アラシ</sup>くるものがあった

「これをおどにかしなきや」

ハルトの田の前にあるのは積み上げられた荷物

もちろんハルトのではないハルトの荷物は必要以外のものは持つてきていなく

こんなに多いわけがない

時刻は7：00ベッドで<sup>アラシ</sup>持ちよせやうに寝ている少女がこの荷物の持ち主である

「・・・・・しうがない。起こすしかないか

ベッドに行き搖さ<sup>アラシ</sup>るうとしたがハルトはそれができなかつた

「どうした？ ハルト」

カリエスが聞いてきた

「いや・・・・・なんか寝顔を見ていると起こせなくつて

くそれつていつものパターンじゃない」

リヴェルトが面白そうに言った

「いつもハルトがミオの所を起こしているからな」

カリエスが懐かしむように言った

「なんか勝手な妄想してるけど……仕方ないリヴ頼んだよ」

「はいよ」

リヴェルト《以下リヴ》はトランペットを取り出し鳴らし始めた

朝には大きすぎる聲音それでもミオは何のへんてつもない顔で田原  
めた

「ん? なに?」

「ミオ寝過ぎ荷物の整理しなきやいけないんだよ」

耳をふたながらハルトはミオを引っ張り起こした

「ほら、早く着替えて荷物の整理しよう」

「ふあ~~~~~い」

ハルトは洗面所に行きミオはパジャマを脱ぎ捨て服を探し始めた

「あれ? 着替えがない」

「どこを見ても自分の服がなくミオは仕方なくハルトに聞きに行つた

下着のままで

「ねえ、ハルト私の着替え知らない？」

「え？ 確かそこに掛けてあるはずなんだけど・・・・・・」

ハルトがミオの方を向き硬直した

「ミオ……お前なんて格好してんだよ……」

寝ぼけているミオは自分が今どういう姿なのか認識できずにいた

しかしハルトの驚いている顔と自分の下着姿を見て

震え顔になつた

ミオの悲鳴とハルトの顔を叩く音がWAXAの宿舎に盛大に広がった

ハルトたちの部屋でシドウは爆笑してた

「笑わないでくださいよ暁さん」

平手打ちを食らつたハルトの顔は真つ赤に腫れ上がつていた

あの悲鳴を聞いて宿舎にいた全員が駆け付けた

その時のハルトはミオの平手打ちにより撃沈してた

（もうお嫁にいけない・・・）

ミオは自分がした事が恥ずかしくて仕方なかつた

「いや〜〜しかし君たちは面白いね」

「もうからかわないでくださいよ。で、話ってなんですか？」

ミオはシドウに淹れたてのコーヒーをだし話した

「そうそう。実は明日WAXAに星河スバルが来て本格的な遊撃隊を結成しようと思つんだ」

「え？ 星河スバルが来るんですか？」

「ああ、まああいつに言つたことは、例のPGMができたから取りに行つて

欲しいって言う事だから」

「例のPGM？」

ハルトは首を傾げた

シドウはコーヒーを一口啜ると喋つた

「サイバーメリーゴン  
電腦竜のPGMや。スバルはその電腦竜と融合したりやつ

てまあ大変な」とになつたわけだ

「そうですか……」

「まあとつあえず今日は荷物の整理をしなやこましょい

ミオが元氣よく言つた

「殆どはミオのなんだけどね……」

「へく

「まあやつ言つ事だ、おれは失礼する」

シゲウは「一ヒーを一氣に飲み干し部屋を出て行つた

「さて部屋の整理でもするか

「やうだね。じゃあハル……」

「ミオは自分の荷物をやつてね」

言つ切る前にやつぱり言われてしまい舌打ちをしたミオ

「やつと終わつた~~~~~

PM5:00

「はあ疲れた」

一人はベッドに寝転び一息ついた

一日中部屋の掃除などの荷物の整理などしていた為疲れるのは当然のことであった

「夕食まで時間あるからお風呂入つてきたり?」

ハルトは勧めたがミオはその前に寝てしまっていた

「つたくしょうがないな」

ハルトは仕方なくミオの体に布団を敷き部屋を出た

WAXAでの生活（後書き）

うへへへん出始めたわりに微妙ですね  
まづよつと工夫をしなければ

## 出逢い（前書き）

オリキヤラのウイザードの名前変更しました  
あと劇場版ですが予定ではサイバーテロと戦う予定で  
さて本文でも行きますか

## 出逢い

月曜日スバルは病院へ検査しに行つたミソラと一緒にWAXAへ行つた

「ミソラちゃん怪我の方はどう?」

「今秋にはギプスを外すことができるって」

二人は話しているうちにウーブライナーはWAXAに着いていた

「暁さんの話ってなんだろ?」

「また悪い奴らが動き出したから遊撃隊でも結成するんじゃない?」

「へ、俺がすべてぶつ倒してやる」

「あんたもうちょっと落ち着いたら?」

話しているとスバル達の前方にゴン太がいた

「あれ? ゴン太こんなところで何してるの?」

「いや、シドウさんに呼ばれてきたんだけど誰も来ていないようだ」

「やつぱり遊撃隊のことね」

ハープが断言した

「とりあえず中に入らうぜ」

中に入ると一人顔馴染みの少年が立っていた

「ジャック！！」

「スバル！？」

ジャック・・・以前ディーラーという組織で流星『メテオG』を

落とす作戦をした人物であった

「ジャックも暁さんに呼ばれたの？」

「ああ、でも俺はもともとこの宿舎に住んでいるからな」

「で？後ろの一人は？」

ひょこっとミソラが顔を出してきて

ジャックの後ろにいる二人の少年と少女について尋ねた

「この二人は昨日アメロッパから派遣されてきたんだ」

ジャックが説明をすると二人は自己紹介をした

「はじめてまして、西蓮寺ハルトです」

右側の男の子がしゃべった

続いて左側の女の子がしゃべった

「鳴無ミオです」

自「」紹介が終わると今度はスバルが先頭を切つて喋った

「僕は星河スバルよろ・・・」

「じつてるよ」

不意にハルトが言った

それに続きミオも言った

「そここの女の子が響ミソラ。でっかい男の子は牛島ゴン太ね」

ミオは『完璧でしょう』といつもうな顔で言った

くおまえら電波体持つているだろ?>

ハンターからウォーロックが出てきた

(これがウォーロック)

ハルトはウォーロックを凝視した

「もちろん持つているわよ。じゃなきやアメロッパからこなんなどころまで来ないわ」

ミオが言いつたがウォーロックは質問を続けた

「それは知っている。質問が悪かつたようだつたな。俺が言いたいのはお前らの

「 ウィザードは一部のデータにFM星人のデータがあるだろ?」

「 「 ...」 」

「 どういづ意味?」

話の内容が理解できないスバルは迷わず質問した

「 こいつらのウィザードはアシッドと同じ人工電波生命体だがデータが違う。奴らにはFM星人のデータが含まれている

「 そうだろ? そそり座のスコルピ、みずがめ座のアクアス>

「 ウォーロックが誰かの名前を呼ぶと

「 すかさず二人のハンターから一体のウィザードが出てきた

「 さすがはAM星人の生き残り」

「 やつぱす」 いな

現れたのはサソリの様な姿の電波生命体スコルピと

みずの妖精の様な姿をしたウィザードアクアスだった

「確かに俺にはアンデロメダにやられたんだろう?」  
ルートとカホー ロックが質問攻めをしてくる

「わあ、どうだの?」

適当な答えを返すスコルピ

「ふん、まあいい」

ウイザード回士会話しているヒンドウがけな氣な田でルーツを眺めていた

「そんな時間なんだけどいいかな?」

時間を忘れていたスバルたちは大急ぎで研究室に向かった

キズナ（前書き）

昨日更新しようかと思つておしたが親がつねにこので  
できませんでしたすんまそ・・・

## キズナ

「ヨイリー博士、全員揃いました」

全員いるのを確認した全員横一列に並んで窮屈さは見られない

「じゃあシドウちゃんから話して」

先に話すように言われたシドウは何秒か間を開けていった

「君たちに呼ばれた理由、それは分かつていると思つが

サイバードラゴン  
電腦竜を凶悪に使い世界を滅ぼそうとしている組織

グローカーが動き出している。君たちはその組織に対抗するため選ばれたメンバーである

続いてシドウからヨイリーが話を始めた

「そのグローカー一人一人強力な力を持つている。

それに匹敵するための新しいPGMを渡すわ」

するとスバル以外全員のハンターにPGMが送信された

「IJのPGMは?」

すかさずハルトが聞いてきた

「これは『キズナ』といつもよ。発動するにはその人の絆の力が必要になるわ」

「発動したらどうなるんだ?」

次はゴン太が聞いてきた

「メタモルフォーゼ変幻能力」という現象が起きて電波体に変化がみられるわ

その時の電波の周波数に合わせて戦うことができるわ

丁寧な説明に一同は納得した

だが不機嫌なのが約一名

「おー!…ばあさん、俺たちのPGMはねえってどうこうことだ!..」

!」

今でも鼓膜が破れそくなぐらいの声でウォーロックが叫んだ

シドウとアリーヤー以外全員耳を押さえていた

「ウォーロック、自分だけPGMを渡されない如きで嘆くのは周りに迷惑です」

シドウのウィザードアシッドがウォーロックに言い放った

「…」

どうやらウォーロックはアシッドの前では口が立たないらしい

「大丈夫よ、スバルちゃん達の分は後で渡すから」

それを聞いてスバルはほつと胸をなでおろした

「遊撃隊の出動はグローカーが動いたときに出てる

だから不定期だからな。ちなみに今回の場所は北海道」

「北海道に何があるんですか？」

動搖もせずミオが聞いた

だが見てみるとスバル達も驚く暇はないようだ

「能力破壊アビリティブレイクが北海道にあるという情報が出ている

奴らも北海道に行く可能性は高い。今回の任務はスバルとミソラとハルトとミオに行かせる」

「能力破壊アビリティブレイクってグローカーが言つてたやつだよね？」

ミソラが横にいるスバルに聞いた

「そりいえば・・・・能力破壊ってどういう物なんですか？」

能力破壊アビリティブレイクがどういう物か知らないスバルはヨイリーに聞いた

「能力破壊は電子機器やウイザードの能力を

アビリティブレイク

アビリティブレイク

アビリティブレイク

アビリティブレイク

破壊するPGMよ。電波変換した人間にも危害が加わるわ

「ほかのPGMもあると聞いたんですがその場所は特定できたんですか？」

「まだ確認していないな。とりあえず北海道にあるという事だけがわかっている

「他は手当たりしだい探してみる」

そして今回の会議はお開きとなつた

「スバルちゃん」

ヨイリーに呼び止められたスバルはミソラ達を先に外へ出させ

残つた

ヨイリーはスバルのハンターにPGMを送信した

「これは何ですか？」

「キズナ。キズナの進化版とも言つていいわ

「そんなすごい代物俺たちがもうつていいのか？」

ウォーロックがハンターから飛び出していった

ヨイリーは真剣な表情で言つた

「スバルちゃん達だからだよ。これは<sup>サイバードラゴン</sup>電腦竜、アルテレギオン

のPGMを制御することができるのよ」

「アルテレギオン?」

その言葉に首を傾げるスバル

「<sup>サイバードラゴン</sup>電腦竜の名前よもう一体はユニア・バサリオン。

どちらも強力な力を秘めているわそのPGMを使えば暴走せずにいられるわ」

「す、い」

「でもよ、同じようにキズナの力がなきやダメなんだろ?」

「そうね。でもその力を発揮したときロックマンはさらなる力を秘めるわ

まさに鬼神の様な力……<sup>エクスピロージョン</sup>鬼神化よ」

一つ一つの質問を一寧に答えていくヨイリー

そしてウォーロックは興奮したような声で言った

「おお!…なんか強そうじゃねえか。」

感嘆の声が出てくるウォーロックにスバルは気にせず気になつたことを言った

「でもやつらは僕の体内の中にあるPGMを狙つてくるんですか？」

「奴らが今の所スバル君のPGMを奪つ氣はないよ」だけど

くれぐれも氣を付けるよ」

「わかりました」

PGMをもう一回元気になりつつあった

「それじゃあ氣を付けて帰つてね」

「失礼します」

スバルは研究室を出て行つた

その背中は今まで以上に輝いていた

## また転校生

「これからどうする?」

スバルが戻ってきてその場に立ち尽くしていたミンラ達は

退屈していた

「そうね宿舎に行つても何もすることないし」

ミオが考えながら言った

するとミンラが何かを思い出したかのように言つた

「そういうえばスバル君、お母さんにお遣い頼まれていなかつた?」

「そういうればスピカモールに・・・・ごめん、みんな先に帰つて  
るね」

スバルとミンラは早々と去つて行つてしまつた

「あの一人は付き合つてるの?」

ハルトは横にいたジャックに言つた

「さあ?本人に聞いてみたら

首を傾げるジャックは知つているかのような口調であつた

そしてハルトはこの場にいても意味がないと思いミオに声を掛けた

「ミオ、僕たちもどうか行く？」

唐突にハルトが聞きミオはびっくりした

「え? ジャあ・・・・・・ヤシブタウンのデパートで買い物した  
いんだけど」

ハルトは了解を得てウエーブライナーに乗り込んだ

さて俺は姉ちゃんの料理食わなきや

シヤツケはそういう宿舎に帰つていつた

「あれ？」

一人残されたゴン太はどうしていいのかわからず近くの牛丼屋に立ち寄った

ノグローカー

静寂の広間には何人かの大人と子供が立っていた

最初に言葉を出したのは10歳ごろの男の子であつた

「アビリティブレイク で？ 能力破壊はどこにあるっていうんだ？」

首を傾げて問うたのは赤髪の青年であつた

「北海道とか言つていていたぜ」

「京都の次は北海道か・・・」

紫の髪の女が呟いた

「お前たち」

3人に声を掛けたのは長身の体つきのいい男であった

「WAXAはうちら組織がPGMを奪つ」とは分かつてゐるはず

ゼオルはフツと小さく笑つた

「今日はレウンとコーナにいつてもらつ。一人で大丈夫だな?」

「問題ありません。」

小さくコーナはつぶやいた

「二人で十分だ」

力強くレウンが言った

そして固まつていた集団がどんどん散つて行つた

休みが明けスバルは学校にいった

ミンカラはギップスをもう外しており一足早くに学校にいった

そしてスバルはいつも通り学校に来た

そういういつも通り

「はあ、はあ、間に合つた」

息を切らしながら教室に入ってきたスバルの前にルナが立っていた

「遅刻よ。残念ながら」

ミンカラは遠目でスバルの方を見てクスクス笑っていた

「よーしHR始めるぞ」

ドアを開けて中に入ってきた育田先生

「えー今日はこの時期には珍しいが転校生が来ている」

するとクラスがざわついた

「この時期に転校生?」

「これはややわつきの一言

「この時期にめずらしいわね」

「ほんと、なんか知つていそうな人が来るよつな」

「それって私のこと?」

ミソラが笑顔で聞いた

しかしそバルは曖昧な微笑で受け流した

くスバル、お前が言つたことあながち間違いじゃなねえ>

突然ウォーロックがしゃべってきた

「え? ビリ? いつ?」

く昨日のあいつの電波を感じるあいつは・・・>

ウォーロックが言おうとしたその瞬間

ドアが開き、一人の男女が入ってきた

その顔はスバルたちが知っている顔であった

「西蓮寺ハルトです」

「鳴無ミオです」

「「よろしくお願ひします」」

一人そろつて挨拶をした教室内からは驚きの声が上がった（おもに  
男子）

「かわいくねー? ミソラちゃんと同じくらいだな」

男子が主に声を上げていた

そして一人は育田先生に誘導され席に着いた

二人の席はスバルとミソラの後ろであった

「よろしくねスバル君」

「まさか転校してくるなんて」

スバルが驚きの声を上げる

「びつくりしたでしょ」

「けつ、まさかとは思つたがやっぱりお前らか」

ウォーロックがため息交じりに言つた

そしてHRが終わり授業の準備に移つた

「二人は知り合いだつたのね」

ルナが歩み寄つてきて話した

「まあ、昨日WAXAで・・・」

「でも一つのクラスに三人も転校生が来て大丈夫かな?」

ミソラが首を傾げその質問にキザマロが答えた

「ジャック君やツカサ君がいないからしいです」

「さて準備でもしましょつか」

ルナはそういうと自分の席に戻った

「そうそう、スバル君放課後屋上に来てほしいんだけど」

「別にいいけど……」

「じゃあ放課後ね」

ハルトはそういうと授業の準備をした

スバルは何の話かめどがつかなかつた

## また転校生（後書き）

無理やりでいいません……  
一応戦いに合わせられるようにミソラのギプスは外しました  
また転校生…………もうだしませんよ

**模擬戦（前書き）**

最近自分でも話の流れがつかめません

（放課後）

スバルはハルトに言われた通り屋上に向かつた

「このパターンどつかであつたような……」

階段を歩いているスバルにウォーロックが話しかけた

屋上へ着くとハルトの姿はなかつた

「どうにもいないね」

〈ウイルスの気配はないけどな〉

「縁起でもないこと言わないでよ」

すると屋上のエレベーターが開いた中にいたのはハルトとミオだった

「じめん遅くなつて」

「いいよ別に。で、話つて何？」

スバルはすぐさま本題へと移り変わつた

「実は今朝シドウさんから話があつてグローカーが動き出す前に

お互ひの力を比べあつたらどうだつていうから

「腕試しつて言う事か」

ウォーロックが腕を振り回しながら言った

「うへへへん、確かにお互いの電波化した姿見たことないし特訓も兼ねてつて言う事なら」

スバルは同意した

「じゃあ審判は私がやるわ」

「ルールは」の屋上のウエーブロードとその周辺

「やつてやうひじやねえか」

「トランスクード003、シューティングスター・ロックマン……」

「トランスクード#?スコルピオ・カイザー……」

電波化した二人はウエーブロードを駆け抜けた

「あれ? どいつもいたんだろ?」

ミンラは教室からスバルがいなくなつて探していた

校内のあちこちを探しているがスバルの姿はどこにもない

「UJの展開前にあつたよつな……」

しぶしぶ思い出すミソラ

く屋上にウォーロックの電波が感じじるわ

「ほんと…」

ミソラはハープに言われた通り屋上へといった

しかし屋上に行つてもスバルの姿は見当たらずミオの姿しかなかつた

「あれ? ミソラちゃんどうしたの?」

空を見上げていたミオは気づき炬を掛けた

「スバル君探しているんだけど知らない?」

「ああ、一人ならあそ」

ミソラはミオの指差した方向に田をやつた空では火花が散つていた

くハルトと戦つているのね

「ええ、そうよ」

「でもなんでいきなり?」

くお互いの力を試したいからよ

アクアスが言った

「私は審判だから今ここにいるの。ミソラ茶ちゃんも見ていく?」

「うへへへん、どうせ暇だから見ていい」

ミソラはミオと一緒に観戦していった

「スバル・ハルトサイド」

電波変換したハルトの姿はスコルピによく似た<sup>アーマー</sup>装甲を身にまとっていた

「あれがスコルピオ・カイザー」

くさすがFM星人のデータが入っている人工電波生命体だぜ

ウェーブロード上は閑散としていて二人の間からは氣合というか何らかの空気が漂っていた

「さて、はじめようか。スバル君・・・・じゃなくてロックマン」

たかが模擬戦という物だろうがハルトの目は真剣であった

スバルも体勢を取った

「いくよー！」

二人は力強く地面を蹴りあげ早々と攻撃を繰り出す

「人は互角と言えるほどの力だった

「やるね」

攻撃がやみ息を整える一人だがロックマンは次も攻撃を出した

「バトルカード。エアスプレッドX!!」

銃弾がカイザーを襲つた

「アイスサイズ  
氷結鎌!!」

しかし鎌を取出しすぐさま氷の波を出して薙ぎ払つた

くやるじやねえか・・・・・

「バトルカード、エドギリブレード3!!」

「アイススラッシュ  
氷輪斬!!」

ぶつかり合つた攻撃その間から蒸氣が出てきた

「強い・・・・・」

「スバル君これ・・・・・」

二人は息を切らしていた

<ハルト、これしきでくたばるな>

スコルピが出てきていった

「スバル!! まだ始まつたばかりだぞ!! もつとシャキッとしろ」

ウォーロックもスバルに喝を入れた二人は立ち上がり再び戦闘体勢に入つた

「バトルカード、ソード、ワイドソード、ロングソード、ギャラクシーアドバンス G A

「ジャイアントアックス!!」

ギャラクシーアドバンス GAを発動させたロックマンは大きく剣を振りかぶり

切り掛かつた

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「ならばこっちも!!」

カイザーも鎌を大きく振りかぶつた

「爆氷波!!」  
ザ・ブロゾード

また爆発が起つた

二人はまだ立つており倒れる気配は全くなかった

「やるじゃねえか」

「そりゃあや」

するとハンターから通信が入った

『二人ともそこでおしまいよ』

相手はミオであつたそして電話越しにミソラの姿があつた

〈まだやれるぞ！！〉

ウォーロックは意地を張り腕を振り回した

「ウォーロックいい加減やめよ！」

スバルは力の抜けた声で言つた

「僕も疲れた」

〈ハルト何も言つている！！まだ時間はあるぞ！！〉

〈スバル早く立て！…やるぞ！！〉

いい加減うるさいと感じた一人は強制的にウイザードオフされ

ウーブアウトした

**準備（前書き）**

すいません文化祭明けでなかなか更新できずになに・・・

現実世界に戻ったスバルとハルトは疲れでその場に倒れこんだ

「はいハルト」

ミオはハルトに水を差しだした

それに続いてミソラもスバルに水を差しだした

「ありがとうミソラちゃん・・・・・つてミソラちゃん！？」

スバルはミソラが屋上にいることに驚いた

「なに？私がここにいると何かまずかった？」

「いや・・・なんでここにいるのかなって・・・」

スバルは疑惑と共に疑問に感じた

「いや、スバル君と一緒に帰ろうとしたら教室にどこにもいなくて探していたら

「ここにいたから」

ミソラは今までの経緯を説明した

「で、どうだった？」

ミオはさりげなく模擬戦のことを聞いたハルトは一息ついて言った

「簡単に言つと互角」

「もつと時間があれば結果は分からなかつたけどな」

スコルピが負け惜しみの様な事を言つた

ハルトとスバルは空を見上げた時間帯はもう夕暮れ近い下校時間も  
近い

「そろそろ帰るか」

スバルが立ち上がりミンラと共に屋上を出ようとしたがハルトに呼び止められた

「そうだスバル君」

「何?」

「ミンラちゃんもだけど明日WAXAに来てね」

「え? いきなり? でも明日学校だよ」

首を傾げるスバルミンラも横で頷いていた

「大丈夫だよ学校には連絡をつけておくからじいから」

スバルはハルトの言葉に少し変な疑問を感じた

だがそんなことは気にしなかった

「とまあえず今日は帰るつか」

改めてスバルたちは屋上を出て行つた

「疲れたな～～」

帰り道ミオと並んで歩いていたハルトは大きく伸びをした

「転校初日つてこんなに疲れるんか」

するとミオはハルトに抱き着いた

「ミオ！？」

突然の行動にどう対処すればいいのかわからなかつた

「いいじやん。宿舎に着くまでこいつしていたいの

力強く言つたミオにハルトはやれやれという顔をするしかなかつた

夕日がともす一人の影は何処までも伸びていつた

一歩スバル達も帰つている途中であつた

「北海道か」

空を見上げながらスバルが呟いた

「そんなに氣になる?」

横から覗いてきたミソラは心配そうな表情で聞いた

いや……いや、までも平穩な日々を繰かんしたな……て

榮鏡なことを言つてゐるハリはミソハミを二方に

三、三に辨を染めかたる離れかい 三、三に拂ひじゆかた

一人は家に着くまでずっと手を離さなかつた

ノグローカー

「準備はいいか?」

ゼオルが声を掛けると問われたレウシとトニー・カーラーは頷いた

一 サシル起動せろ」

- 6 -

言われるままサシルは手元にあるレバーを引いた

すると二人の足元になんかの円陣が出てきた

すると光に包まれレウンとローナの姿はなかつた

「邪魔はえんぞ・・・WAXA」

家に着いたスバルとミンラはすぐにタジ飯を食べた  
しばらくして久しぶりに帰宅した大吾が帰ってきた

「おかえり、父さん」

「ただいま。おや? お密さんか?」

大吾がミンラの方を見て言つとあかねが大吾に歩み寄り耳打ちした

「せつそうかー」

大吾も納得したようで席に着きスバル達と一緒に食事をとつた

「そういうえば母さん、明日WAXAに用事がでちゃって明日学校  
を休まないと行けないんだけど」

不意に放課後ハルトに言われたことを思い出した

「あらそうといえば今日暁さんが家に来てそう言つていたわね。いい  
よ先生にはいつておくから」

「ありがと」

一人は皿の上のものをすべて食べ尽くし片付けた後それぞれの部屋へといった

「成長したなスバル」

「ほんと、あなたそっくり」

大吾とあかねはいつまでもスバルとミンラの背中を見守り続けるのであった

「え~~~~と明日は7時に起きなきや」

目覚まし時計をいじっているスバルその横にウォーロックが入ってきた

「そんな早い時間に起きられるか？」

ウォーロックが聞くとスバルはムッとした顔で振り返った

聞くところによると明日は寝坊してはいけないほど大事なことがあるらしい

目覚ましをセットし終えたスバルは明日必要なものは何か確認した

「これでよしつと」

一通り終わり一息ついたそしてハンターを開きヨイリーからもひらつたキズナ を眺めた

ウォーロックは何か言いたそうだつたがずっとスバルの方を見ていた

「キズナの力で能力を発揮するPGM」

ぼそつとつぶやきスバルはベッドに入った

**準備（後書き）**

疲れました・・・三日間の投稿・・・

次から新章突入です

## 出動（龍巣町）

更新できずすいません

## 出動

目覚ましにセットした通りの時刻に起床したスバルは着替えて一階へと向かつた

一回には既にミソラが朝食をとつていた

いつものあいさつを交わしスバルもお皿の上にのつてあつたパンに  
齧り付いた

今日の集合時間は7時30分残り20分の時間をスバルとミソラは  
呑気に過ごしている

余裕はない

支度を終え玄関を出よつとした

「じゃあ行つてくれるね」

「行つてきます」

「気を付けてね」

二人は家を出た

「そついえばルナちゃん達には言つていなかつたよね

駅に向かいながらミソラが聞いてきた

「いいじゃねえか。ゴン太の方で何とかするだろ」

二人はウェーブライナーにのりWAXAへと向かった

時刻は7時25分予定の時間より5分前に着いた

研究室に入るとハルト、ミオ、ジャック、ゴン太の4人がいた

そしてヨイローとシドウも入ってきた

「時間通り……さて……」

シドウは一つ咳払いをして喋った

「朝早くから集まつてもらい急で悪いんだが……昨日グローカーが動き出した

急遽スバル、ミソラ、ハルト、ミオには北海道に出動してもらひ

「え！」

スバルはびっくりして声を上げてしまった

しかしふっくりしたのはスバルだけじゃなかつたほかのみんなも目を丸くしていた

「へ、いいじゃねえか腕が鈍ると戦えなくなつちまつからな

「でも俺たちはどうすればいいんだ？」

今回任務に參加しないジャックとゴン太はすることがない

「念の為ここにいてもうほかの奴らが来るかもしけん」

そしてシドウは任務に行く4人の方へと向き直った

「お前たち準備はいいか?」

「「「「はい……」「」」

最初シドウの言葉に疑問を感じていたがやると決まった以上スイッチを入れた

そして4人は奥の部屋へと連れて行かれた

連れて行かれた場所は名の変哲のない部屋しかし中央に大きな輪っかが付いている装置があった

「ここにはワープルーム。本来コスマウェーブを使って欲しいけどウエーブステーションが

アビリティフレイク  
能力破壊でやられているかもしだい。今日は

これを使って北海道のスノータウンに行つて欲しい

4人は領きワープ装置にのつた

「じゃあ起動するぞ」

スイッチを押すと大きな輪が4人を包み込み光をまとい消えた

「頑張つてくれ」

数分後4人は北海道の地へと踏み入れた現在の北海道も冬の余韻が残つている

「ここに能力破壊アビリティブレイクが」

遺跡の方向を見たハルトが言った

〈遺跡からかなり危ない電波が放たれているわ〉

「ひとまずここは安易に近づかないで情報収集とかしてみましょう

道を歩きだし人手のいるところを探し出した

すぐそこに町が見えその通りに一人の男性が歩いていくのが見えた

ミソラはその男性に話しかけた

「すいません、向こうの街つてスノータウンですか？」

「そうだけど・・・スノータウンにようでも？」

「スノータウンの遺跡にようがあるんです」

するとスバルの言葉に男性は表情を強ばらせた

何かに怯えているような感じだった

「悪い」とは言わねえ・・・あの遺跡には近づかねえほつがいい・

あそこには化け物がいる・・・

「化け物?」

スバル達はその言葉に首を傾げた

「あの化け物といつのは・・・」

「あの遺跡は古くから伝わつていてそこを守つてゐるウイザードア  
クイラが突然

おかしくなつちまつたんだよ普段はおとなしいのにいきなりどう猛  
になつて

そのせいで町全体の電子機器ウィザードの本来の能力が使い物にな  
らなくなつたんだよ」

男性の説明に4人は能力破壊アビリティブレイクだという事はすぐにわかつた

「その遺跡には今中には入れますか?」

「入れねえつて言う事はねえが近づくと危ねえぞ でかい球体を待  
ちに投げつけて

電子機器を使用不能にしちまつたからな」

「そりですか・・・ありがとうございます」

男性に一礼し再び歩き出したスバルたち町に着くとさつき言つた通り

町全体の電子機器は機能しておらず人一人もいなかつた

く電波はまだ残つてゐるけど機器自体全く動いていないわね

「能力を破壊するPGM・・・ちょっと電波変換できる私たちには危ないわね」

ミオとアクアスが言つた

く確かに話によるとウイザードの能力も発揮できなくなつたつて言つてたわね

ハープが確信したように言つた

「とにかく遺跡へ向かおつ」

スバルの一聲で遺跡へと直進した

その頃グローカーのレウンとコーナはウエーブロードの上にいた

「いいね」

ぼそりと彼女はつぶやいた 彼女の姿は背中に剣を一本背負つている

「中から危ない電波を感じるぜ」

レウンが返答した彼の姿は背中にこくつかのアンコナのよつむものが

背中で浮いていた

「いれはひとまず様子を見ておいたほうがよさそうな」

「なんだだ？」

「一ナの言葉にレウンは首を傾げた

「私たちが今いくとロックマンが邪魔をして来るわ。それにあのウイザードにも興味があるの」

言い切った言葉にレウンは頷くだけだった

VS 能力破壊者（前書き）

さぼつていてすいません

VS能力破壊者

静まり返った街を後にし遺跡へと向かつたスバルたちは入り口付近で立ち止まつた

「この中からやばい電波を感じる」

「とりあえず準備はここでした方がよさそうね」

「ウイザードの電波ではない……」

「それぞれの言葉に頷きそれぞれ準備した

「ウォーロック行くよ……」

「しゃあ……ひと慣れするぜ……」

四人はハンターを掲げた

「…………トランスクード……」

「003、シユーティングスター・ロックマンー！」

「004、ハープ・ノートー！」

「#?、スカルピオ・カイザー！」

「#、アクアス・ネプチューンー！」

電波変換した四人は遺跡の中へと入つて行つた

遺跡の中は広く迷子になりそうなほどだつた

「この先からやばい電波を感じるぜ」

ウォーロックがいいスバルたちは広い場所に出た

「誰もいないわね」

「たしかに電波は感じたわ」

四人が辺りを見まわしているとウォーロックの体がピクリと動いた

「上だ！！」

突然の叫びに反応したスバルは上を見ると上空から何かが迫つてきた

危険を察知したのか早めに避けると迫つてきたものは地面上に落ち

ひび割れた場所に立つていた

「お前…………何者だ！？」

「私の名は…………アクイラ…………この遺跡の守り主だ」

アクイラと名乗ったウイザードは全身黒く羽のようなものが付いていた

「アクイラ…………この町の電子機器を機能停止にした奴か」

くふん。愚かな人間どもがたかがそんなことをしただけで騒ぐとは

勝ち誇つたようにアクリラは言つて見せた

「なぜこんなことする……」

く簡単なことだ……人間はおろか……ウイザードを道具として扱い

自分で満足するようなことをしている

くそれは違うな

突然ウォーロックがしゃべりだした

今ウォーロックの目は真剣だった 戰いの時とは違う目であった

く人間がウィザードを道具として扱う……それはお前の思っていることとは

違いお互いの信頼関係を築くためにあるんだ 人間自分が満足するなどあり得ない

「ウォーロック…………」

くふん。端くれが。貴様に私の過去など知らない癖して

「過去?」

<私は2か月前までは主人がいたそれはとっても親切な主人であった

働くときも一緒に飯を食う時も一緒に・・・・・いつでも一緒にだった

しかし！彼は突然私を捨てた新しいウィザードができたのだ

それ以来私は人間を憎みここに迷い込んだ

そして見つけたのが凄まじい力を持つPGMだった>

「アビリティブレイク  
能力破壊・・・・・・」

ミオがぼそっと呟いた

<愚かな人間どもは電子機器がなければ生きていけない私は

それを機能停止させるアビリティ  
能力を手に入れたのだ>

「そんなことのために・・・・・・」

スバルは拳を握りしめた

<お前が何をしてかすかはどうだつていが人とウィザードの絆を  
否定するのは許せねえ>

<絆等薄汚いものなどには興味がない>

「アクリラ！今すぐ勝負だ！！」

スバルが対戦を申し込んだ

アクリラはフッと笑つて言つた

く勝てないと分かつていてもやるのか・・・・・>

「スバル君、僕も」

ハルトが応援を頼もうとしたがスバルは首を横に振った

「ここは僕がやるみんなはグローカーが来るかもしれないから見張つて」

「ここはスバル君に任せましょう」

## 三人は遺跡から出た

<こい、愚かな人間どもが>

「ウエーブバトル、ライド・オン!!」

## VS能力破壊者／接戦

「スバル君大丈夫かな？」

遺跡から少し離れたミソラ達はアクイラと戦っているスバルが心配  
だった

〈あの二人ならだいじょだよ〉

ハープが元気づけた

「今は僕たちができる事をしよう」

「そうだね・・・・・・・・」

一方スバルたちはアクイラとの戦闘を開始していた

〈いくぜ！！〉

〈来い・・・・・〉

「バトルカード、ワイドソード！！」

ロックマンは右手から剣をだしアクイラに切り掛かった

〈フライングウェーブ  
飛翔波！！〉

ロックマンが振り下ろした剣をアクイラは技を使って止めた

「どうした？まだ来ないのか？」

「く、バトルカード、ヒギコブレーダー…」

「なら、しかも…クローバーデード…」

アクイラは左手から剣をだしロックマンに向かつて走り出した

両者の剣がぶつかり合ごとに音を立てている

最初は互角に見えたが次第にアクイラの方の力が強まった

「押される…」

フライングウェーブ  
飛翔波！！

ロックマンは衝撃波を食らい下に落ちて行った

「うわあ…！」

壁にぶつかったロックマンは少しよろめいている状態だつた

くちつ、さすがにPGMを取り込んでいる奴の力は半端じゃないな

「でもなんでPGMなんか…」

「さあな、説明している暇はねえようだ。来るぞ…」

上を見上げると猛スピードでアクイラがロックマンの方向へ向かつていった

ロックマンはそれを何とか避けきった

「ここのままじや相手のペースになっちゃう・・・」

スバルは何かないか考えていた

そのころミンラ達はグローカーが来ないか遺跡の周りを見まわっていた

それに気づいたコーナとレウンはすぐさま行動に移り変わった

「レウン行くぞ！――

「はいみ

電波変換した二人はミンラ達の方へ直進した

レウンの電波変換した姿は背中に大きなルーレットの様なものを背負つており

体は黄色と灰色だった

コーナは背中に日本の刀を装備しており髪の毛と同じ色の装甲アーマーをまとっていた

その一人がそつちに向かっていると殺氣づいたハルトは振り返った

目の前には刀を取り出したコーナの姿がありハルトはすぐさま鎌でガードした

おなじくレウンもミオとミソラに攻撃を仕掛けた

「お前らグローカーか！？」

「ええ・・・そうよ私たちはグローカー。私の名は・・・コーナ。  
・

そしてこの姿はグラビティ・ソルジャー」

「お前らはアビリティブレイク能力破壊が目当てだろ！？」

「だからどうした？」

「ハルト！」

突然カイザーの後ろに回っていたレウン・エレキ・ディザーは手から電撃を出した

「ぐはあ！..！」

「ウォーターネット  
水網波！！」

ネプチューンはトランペットを取り出し音色を出すと水の網が現れカイザーのクッショնになった

「じゃましやがって・・・雷撃柱！..！」

ウーブロード上に雷の柱を呑みネブチューに向かって繰り出された

「ハサちゃん……ショックノート……」

ハープノートが攻撃を封じた

「ちつ、姉ちゃんその鎌を背負つた奴俺にやられてくれ」

「好きにしなれ」

「うわあだーー！」

カイザーは罵られるまま場所を移した

「わー・・・私はこの手裏剣付けないとこけないようだね」

「来るよ・・・・」

「二人とも気をつけなさい。あいつはとんでもない奴だわ」

「わかった・・・」

「「ウーブバトル、ライド・オン！ーー！」

「八裂きにしてあげるわ」

VS能力破壊者→接戦→（後書き）

急な場面転換ですいません

VS能力破壊者～苦痛～（前書き）

お待たせしました 一週間？期間はよく分からないですけど  
待たせてすいません

VS能力破壊者 → 苦痛

ミソラ達がグローカーと戦っていたその頃のスバルはアクイラと激しい戦いを繰り広げていた

「マッシュバルカン！！」

「クローショット！！」

力にそれほど差は見られなかつたが明らかにロックマンの方の息切れが早かつた

「どうした、もう終わりか？」

余裕の表情を見せるアクイラその顔から笑みがこぼれた

「お前の・・・好きにはさせない」

「いや足掻いた所で何の得も得れん。飛翔波！」  
フライングウェーブ

攻撃を食らい壁にぶつかつたロックマンはもう立ち上がる力さえ残つていなかつた

「スバル、しつかりしやがれ！！」

ウォーロックに言われ立ち上がろうとするがその場に崩れてしまった

「これでおしまいだ・・・・クローブレード！！」

アクリラは展開された剣を振り下ろした

しかし剣はロックマンの目の前で止められていた

＜なに!?>

ウオーロッケは劍を受け止めていた

「アハル…お前は一人じゃなし…」

今までの戦いはお前一人じゃ勝てないほどの戦いかいくつかあつた。・・・

「ウオーロック・・・・」

△綺麗ことを・・・・・・△

『そ、うだ・・・・・僕は一人じゃない・・・・・・・・・みんながい

( ( キズナ力感知。 パワー 上昇中・・・・ 84% ・・・ 92% ・・・ 10

キズナ 起動します）

卷之三

<なんだ！？・・・・・・>

光に包まれたロックマン 現れた姿は以前PGMを見つけた遺跡で  
暴走した姿だつた

「いくよー!!」

「かかってきなさい」

一方ミンカラとミオはグラビティ・ソルジャーと対立していた

「ウォーターボイス  
水音撃!!」

ミオはトランペットを吹き波を出したそれに向かったソルジャーは  
簡単に切り裂いた

「ショックノート!!」

続いてコンボをだし音波を出したハープ・ノート

だが音波も簡単に避けられてしまつた

「……………そい」

「え?」

「遅すぎるの……」

そしてソルジャーは姿を消した

「どこ行ったの？」

「三木ちゃん上…！」

「え？」

ミオは上を見上げるとそこには剣を構えているソルジャーの姿が映し出された

## 「重力刃！！」

「体が・・・動かない」

↙ • • • • //↑^

「よそ見をするな」

ソルジャーはハープノートに攻撃を加えた

だがハープノートは間一髪で攻撃を食い止めた

「少しほは骨があるな」

「おもかげ」

↖//ソラ集中しなさい↖

「ショックノートーーー！」

「エイントスラッシュ  
ハ斬剣！！」

攻撃がぶつかり合ったがハープ・ノートとソルジャーの距離は遠ざかつた

「マシンガンストリングーーー！」

「ーーー」

ギターから弦をだし音色を出すとソルジャーは麻痺した

そして麻痺したところに念心の一撃を入れた

「タイボクザン！！」

VS能力破壊者～苦痛～（後書き）

変なところで終わってしまいました・・・

VS能力破壊者～空中戦～（前書き）

遅くの更新です

## VS能力破壊者 → 空中戦

まだ微かに冬の余韻が残る北海道の地では三つの戦いが広がっていた

一つはロックマンとアクイラによるPGM破壊戦

二つ目はハープ・ノート、アクアス・ネプチューンとグラビティ・ソルジャー

による地上戦そして三つ目は・・・・・

「アイスサイズ  
氷結鎌!!」

「スパークリング  
電光輪!!」

スコルピオ・カイザーとエレキ・ディザーによる空中戦だった

空中戦といえどもウェーブロード上で戦っていた

<属性はこちらが不利だがここは有利にするぞ>

スコルピの言葉にハルトは頷いた

「なにが有利にするだ!! 電流爪!!」

電流をまとった爪を剥き出し襲い掛かった

「アイスクラッシュ  
氷輪斬!!」

きつぎりまでひきつけ攻撃をはじいた

「へっ、なかなかやるじゃねえか」

苦笑するティーザー カイザーはその隙を狙おうとしたがビームもいなかつた

「お前との遊びはこれでおしまいだ!!」

「!?」

△ハルト!! △

ティーザーはカイザーの後ろに立ちルーレットの様なものを田の前に出した

「これでおしまいだ!! 電滅波・サンダーアビスブレイク流電砲!!」

発射された電撃砲にカイザーは直撃した

「うああああああああ!!」

電撃を大量に浴びたハルトの体から電技氣が放出され動ける状態ではなかつた

「思つた以上に時間を食つちまつたな 姉ちゃんまだやつてるかな」

そつ思いながら倒れているカイザーに背を向けた

「あれ？おれなにしてんだ？」

ハルトが起きると辺りは真っ暗だった

ハルト・・・・・>

スコルピが目の前にあらわれた

「スコルピオ、俺は何してんだ？」

く俺もよく分からん……けど

- けど？

くじは俺達が居てはいけないような場所だろ？

ハルトはアールビの言ひでしる」とか理解できなかつた

卷之三

お前はまだ死んではいけない

俺はまだ死んではいけない・・・・・

ハルトは自分の右手の掌を見た

「俺たちが最初にダウンするとあの一人が厄介ごとになるぞ」

少し笑顔でスコルピが言った

「……………そ、うか」

あいつらにいのはミオとアクアスのことだろ？

ハルトは上を見上げた

「まだ終わってねえぞ！！」

カイザーはむくつと起きた

「なーーお前…………あれを食らって」

「これでも俺はタフだ」

カイザーは足元に置いてあつた鎌を持った

「スコルピ…………コレシットレース限界解除…………」

「ふへへへ、そういうと思つたよ」

呆れるよスコルピはため息をついた

「何ぶつぶつ言つてやがる……」

デザーが文句をかましているのもお構いなしにハルトは呪文のようないふを唱えた

「失われし星座の力よ蠍座の宮に限界の解除を申す・・・」

「田をつむり呪文のような言葉を継ぐカイザー

「なんだ？死ぬ前に何かのおまじないか？大丈夫楽に死ねるさ・・・」

再び背中のルーレットの田の前に出した

「グランドサンダー  
激雷砲！！」

「コモリトレース  
『限界解除！！』

カイザーを包み込んだ光とディザーが放った技は同時に繰り出された

VS能力破壊者～氷づけ～（前書き）

すいません更新をおおいにサボってしまいました（（殴  
腕が落ちていないかどうか心配です

## VS能力破壊者 → 氷づけ

<・・・・・なんだ、その姿は！？>

アクイラが見た姿は恐竜の姿をしたロックマンだった

「・・・・これが・・・・鬼神化・・・・」  
エクスプロージョン

スバルは自分の姿に感嘆を上げた

紫の装甲をまとい閉じたままの翼、両手にはめられた鋭い爪  
まさしく電脳竜の様な容姿だった

<ただ姿が変わっただけで・・・・クローブレード！！>

アクイラは剣をだしロックマンに襲い掛かったがロックマンは動こうとしなかつた

剣先が触れようとしたその時ロックマンは鋭い爪で食い止めた

「・・・動きが見える」

<さつきまでの動きとは違う・・・・・>

「アイスクロー  
氷輪刃！！」

爪から繰り出された氷の攻撃はアクイラに命中した

あまりの威力に吹き飛ばされた距離が大きかった

↙↙↙・・・・・↙

「これが鬼神化（エクスプロージョン）の力」

↙全くだ・・・・・これはすごいな↙

ウォーロックが感心しているがアクイラはもつ突進してきた

↙十字終焉斬！！↙

「クリスタルブレイド  
氷冬斬！」

攻撃がぶつかり合つかと思ったがアクイラは姿をけしロックマンの後ろに回った

↙終わりだ！！↙

剣をかざしたがロックマンも姿を消した

上を見上げるとロックマンは上にいた

↙そこいか！！↙

アクイラは猛スピードで駆けるとロックマンは遺跡内から出た

出た場所は遺跡の上空だった

↙・・・・・空の戦いは俺の方が有利だ↙

勝ち誇ったようにアクイラは笑った

「へへ、だからじつした」

ロックマンも電波を帯びた翼を展開していた

「一気に決めるぞー！」

「ブラックツインスラッシュ  
黒龍双斬！！」

黒いオーラがでる剣を出し切り掛けた

ロックマンは右手から水色の球体をだし周りを包み込んだ

それはまるでBEギャラクシーのようだった

「フローズン  
FEギャラクシーーー！」

包み込んだ球体を切り裂くと周りが氷で覆われた

「・・・・・勝った」

アクイラは完全に氷づけになり氷も完全に凍っていた

「さて・・・この後どうする？」「こいつ」と破壊するのか？

ウォーキングの質問にスバルは首を横に振った

「それはダメだよ能力アビリティ破壊ブレイクを破壊するのは

いいけどアクイラはダメでしょ」

「じゃあこのままにしておくのか？」

「うーーーーーーーん、それはそれで・・・」

これからアクイラをどうするか考え始めるスバルだった

「やっぱ壊すぞ・・・」

「だめ！..絶対ダメ！..！」

ウォーロックを必死で止めかかるスバルすでに鬼神化は解けていた

「どうにかPGMを取り出せる方法がないかな？」

考えるスバルにウォーロックはつじつじしていた

VS能力破壊者～氷づけ～（後書き）

今回は割と短めです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9213v/>

流星のロックマン4 DualStar

2011年11月3日22時12分発行